

---

# シークレットゲーム ~BEST OB THE PAIR~ 仮想エピソード

桐島 成実

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シーケレットゲーム～BEST OF THE PAIR～

仮想工ピソード

### 【コード】

N2013N

### 【作者名】

桐島 成実

### 【あらすじ】

どこか違う状況、何かおかしなゲーム。そして提示された不可解な条件。

強制的に参加させられた1~4人のプレイヤー達は、ペアで構成された上、手錠を掛けられた状態で眠られさせていたのだ。

そして当人達の意思とは無関係に、最強のペアを決定すべく、ゲーム

ムの火蓋は切つて落とされたのだ。

悲劇ではなく、喜劇といえるこのシナリオ。その行く末を予想出来るものは誰もいなかつた・・・。

スミス『やあ！みんな集まつてくれてありがとう』

## 第1話「最強ペア決定戦！？」（前書き）

本作の「シーケレットゲーム～BEST OB THE PAIR～仮想エピソード」は、本来のゲーム設定から大きくかけ離れていますので、「了承ください。

又、他のエピソードで見受けられる残酷な表現は、されておりません。ただし、ハチャメチャな内容は多分に含まれていますが・・・。

## 第1話「最強ペア決定戦！？」

シークレットゲーム ~BEST OB THE PAIRS~ 仮  
想エピソード

第1話「最強ペア決定戦！？」

総一「ぐう～」

? ? 「・・・いち、そういう・・・・！」

総一「ん、んん・・・・？」

誰かが語りかけてくるが、総一は耳を覚まそつとしない。心地よいメロディーの様に感じられた声は、次第に大きくなっていく。

? ? 「起きなさいってばー総一ー！」

総一「うわっとおー！」

大声で総一の名を呼ばれた当の本人は、思わずガバッと身を起こす。

? ? 「やつと起きたのね、総一」

総一「・・・ん？ 優希か・・・」

暫くぼうっとしていた総一だったが、頭の回転が始まると同時に、驚きに目をカツと開く。

総一「つてーうわああー！？」

突如情けない声を出しながら、田の前に立つ優希の前でひっくり返り、大の字になる。

桜姫「何よ？ 突然人の顔を見て驚くなんて」

総一「だ、だ、だ、だつてーお、お前ー死んだんじや・・・」

桜姫「うん、そつよ」

うろたえ続ける総一に対し、桜姫はさも当たり前のよひ、やうつと言つてのける。

総一「な、なんだ！」これは・・・夢か？？」

桜姫「夢じやないわよ。ホラ、私の足」

桜姫はそつと言つて自身の足元を指差す。

総一「あ、あああああつ？！」

一步間違つていたら、きっと総一の腰は抜けていたかもしれない。なぜなら、桜姫の足元は透けており、完全な幽靈と化してしたのだ。

桜姫「こらあつ。いつまでも驚いてないで、周りをみなさいな」

桜姫に促され、一度考えを打ち切つた総一は、辺りを見渡して、今自分が置かれている状況に気がついた。

総一「な、なんだ?」  
「？」

そこは一面コンクリートで塗り固められている建物だつた。どういうことかと考えあぐねていると、すぐ近くに居た別の人形が、気さくに話しかけてきた。

??.「やあ、どうやら田が覚めたようだね」

総一「あ、あなた達は?」

「ひに向かつてきのは2人だ。」

葉月「ああ、僕の名は葉月。そしてこちらが?」

文香「陸島文香よ。・・・どうやら、私達と同じ境遇みたいね」

総一「境遇?」

文香「だつてホラ!腕に手錠がついてるし」

文香にそう言われ、初めて気がついた。文香と葉月。そして総一と

桜姫、それに金属製の手錠がはめられていたのだ。

総一「コレは、一体……？」

首をかしげる総一に、葉月は複雑な表情を浮かべた。

葉月「僕たちも、コレが何を意味するのか分からなくてね。正直困つていてるところなんだ」

葉月はそう言って手を軽く動かす。すると金属のそれが触れ合つて、かるい音が響いた。

桜姫「とにかく、ここから出たほうがよさそうですね」

そつ提案する桜姫。それに異論はないようだった。

文香「そうね。ひとまず行動してみましょ。ええとキミは……？」

総一「ああ、俺の名前は総一です」

桜姫「私は桜姫優希といいます」

2人は丁寧にお辞儀をした。

葉月「そつか、総一くんに優希さんか。これから宜しく頼む」

その言葉を最後に、部屋を出た総一達」一行。その間、総一はびつしても疑問に思っていたことがあった。

みんな、幽霊の優希を目撃しても、何も言わないな。気づい

ていなかだけなのか・・・?

・  
・  
・  
・

長沢「おつーべいせひげの連中も居るよつだぜー」

高山「長沢。お前の言つた通りになつたな

総一達があちこち探し回つた結果、他のプレイヤーと遭遇する事が出来た。

手塚「オラー引張るなつづーの一腕が痛いだろつがー」

漆山「そ、そつは言つてもだなあ

どつやら彼らは同じ境遇のようだ。寡黙そうでシワモノそうな男と、生意氣そうな少年。それとチンピラ風の青年といかにも暑苦しそうな中年男。

長沢「だあーれが『生意氣そうな少年』だつて?」

高山「・・・長沢。ナレーションに文句を付けるのはよくないぞ

漆山「だ、誰が暑苦しそうな中年男だ!失敬な!」

手塚「人の話、聞いてたか?オッサン

名々が好き勝手に話しているのを、総一は半ば畠然としてその様子を見ていた。

葉月「な、なんだか賑やかそうな人たちだね」

文香「そ、そうね」

何はどうあれ、これで総勢8人ということになる。

桜姫「でも、こんなに総勢居て一体何が・・・あら?」

全員がいぶかしんでいる所に、突如スポットライトが点灯し、ある一点を照らし出す。

スミス『やあ!みんな集まつてくれてありがとう』

突然、スミスが現れた。画面上にではなく。

桜姫「ちょ、ちょつと...どうして画面上の存在であるあなたが、ここに存在してる訳!?」

桜姫は驚きつつ、鋭いツツ『!!』を入れる。いや、幽霊であるお前が言つか?と総一は心の中で思つた、が口には出さなかつた。

スミス『これを見てくれたみんなの要請を受けて、この世に誕生した、ジャックオーランタンのスミスだよお~』

そう言って、くるくると弓懸に回るスミス。

麗佳「誰がいつ、要請したって言つたのよー?」

渚「カボチャさんは、お呼びじゃないですか~」

またまた、人が沸いて出てきた。そして矢継ぎ早に非難の罵声?を浴びせる。

スミス『何言つてるんだよお~（怒）ボクが居たから、過去のゲームが盛り上がりつたんじゃないかあ~』

渚「そのせいで、私がどれだけ苦しんだことか、あなたには分からないでしょ~?~?~」

手塚「あいを始めた彼女達を止めたのは、意外にも手塚だった。

手塚「あのな! いいから先進めてくれよ。話が進まねえじゃねえか」

少し苛ただしい一コアンスを含めた手塚。

スミス『あ~、やうだね。えっと、ジャジャーン! 今日みんなに集まつてもらつたのは他でもないつー!』

スミス『実は、今回行われる【最強のペア決定戦!】の参加資格を得るこじが出来たんだあ~』

長沢「はあ? なんだそりゃ

スミス『手錠をしてると思うけど、それがペアの証。ちなみに手錠の輪つかの所に、それぞれトランプの絵柄を模しているから、それ

# もペアの証

高山「…………たしかに、模様が刻まれているな」

スミス』はさて、最強のペアは一体どの組なのか！？それではゲームの詳細を・・・』

手塚「オイオイオイ！ ちょっと待ちやがれ！」

突然、すごい剣幕で怒鳴り声を挙げる手塚。彼は何か不満を持つているようだ。

手塚「何でよりにもよつてこんなオッサンとペアなんだ！？今までのエピソードから考えて、高山の大将か、せめて長沢のガキだろ！」

漆山「こ、こんなオッサン・・・て、手塚くん!? そ、それはな  
いんじゃないかな! ?」

手塚「うむせえー！ テメエなんぞ、例の年増女とでも組んでりやいいだろー？」

郷田「へえ？年増女つて、一体誰のコトかしら？」

手塚「ギクッ！・・・あー、いや、誰のことだらうなあー」

視線を宙にさ迷わせる手塚。彼をそうさせたのは、ひとえに身の危険を強く察知したからだ。そう、まるで鬼神のごとく、殺気が。ゴゴゴゴゴッ！

咲実「同感ですかー！なんで、私達がペアなんですかー！？」

すると咲実が姿を表す。

葉月「キミは・・・。せつか、キミと郷田さんがペアなんだね？」

ずっと後ろで成り行きを見ていた葉月は、よつやく話に加わってきた。

咲実「おかしいですかー？普通、総一さんと私がペアのはずじゃないんですかー！？」

咲実はスミスにさう詰め寄る。

スミス『あ～、でもねえ、ヒピソード』5『』6『では影薄いし、『7』では完全に悪役だし・・・』

咲実「だからってー私をこれ以上貶めないでくださいー！」

スミス『だつて、人気ないし・・・』

ピシッ！

一瞬、スミスと咲実との空間に、亀裂が入った気がした。

スミスの弦きは、かつて手塚が口にした年増女以上の殺傷力があつたに違いない。

咲実「そうですか・・・では、悪役らしくつー！」

咲実はポケットから、大きめのフライパンを取り出した。そして柄を握つて、横一閃にスイングした！

パツカーン！！

気持ちのいい弾ける音が、通路のあたりに響いた。

スミス『あ～れ～』

はりか彼方へと吹き飛ばされるスミス。しかしさすがといつべきか、彼の司会者魂は並大抵ではなかつた。

スミス『と、とにかく！ゲームスターートオーネー···』

声が聞こえなくなるその時まで、開始の合図を出し続けたのは、さすがといつべきだらう。

かりん「くぅ～今度こそ、今度こそ生き残つてみせるんだからあ···

優希「私！まだまだ活躍するんだからっ！」

手塚「いや、お前ら。会話に入る隙間がないからつて、無理やり割り込むんじゃねえ···」

総一「それより、優希が幽霊つてコト、まだ誰も突つ込まない訳？」「？」

何はともあれ、最強のペアを決定すべく、総一達の前途多難な戦いが、本人達の意思とはまるで無関係に、幕を開けたのであった。

参加登録ペア一覧　全7組)

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

- ・エーススペード【御剣総一】&エースハート【桜姫優希】
- ・ツーコローバー【葉月克弘】&ツーダイヤ【陸島文香】
- ・スリースペード【高山浩太】&スリーコローバー【長沢勇治】
- ・セブンクローバー【手塚義光】&セブンダイヤ【漆山権造】
- ・ジャックハート【姫萩咲実】&ジャックダイヤ【郷田真弓】
- ・クイーンダイヤ【北条かりん】&クイーンハート【色條優希】
- ・キングスペード【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】

## 第1話「最強ペア決定戦!?」（後書き）

いつものステージにて、謎のゲームが出現。果たして彼らは様々な珍（？）試練を乗り越えることが出来るのでしょうか？

次回は第2話「踊るマリオネット」総一達はこれから、ゲームとう荒波に揉まれていくことになります。心配な期待（＾＾）！

P・S

真奈美「渚あー、頑張つて～」

かれん「ファイトオーだよー！お姉ちゃん！」

バリボリ・・・

かりん「何、外野でまつたとお菓子食べながら応援してるのよっ！」

明海（葉月の娘）「私のセリフこじだけ・・・ぐすん！」

## 第2話「踊るマリオネット」（前書き）

第2話「踊るマリオネット」

者：桐島成実

作

参加者ペア一覧 残り7組中7組)

『ハイパー・ゴールデン幼馴染カツプル』死さえも乗り越え愛を培う～『・・・エーススペード【御剣総一】&エースハート【桜姫優希】

『ベストバイプレーヤーズ』脇役からの脱却を目指す！～『・・・ツーコローバー【葉月克弘】&ツーダイヤ【陸島文香】

『危うき凹凸コンビ』失わない冷静さ・躊躇なき攻撃は最強の武器となる～『・・・スペード【高山浩太】&スリーコローバー【長沢勇治】

『ビート・ザ・ジョーカーズ』刹那快楽主義の脅威を知れ！～『

・・・セブンクローバー【手塚義光】&セブンダイヤ【漆山権造】

『リアルキラーキーンズ』真のヒロイン&女王様は私！？～『ジャックハート【姫萩咲実】&ジャックダイヤ【郷田真弓】

『チャーミングフラワーズ』不器用さと愛嬌で苦難を乗り切る！～『クイーンダイヤ【北条かりん】&クイーンハート【色条優希】

『ローズプリンセス』うら若き乙女は魅力のカーデ！？『  
ングスペード【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】』  
『キ

司会進行役 ・・・ 【スマス】

特別ゲスト ・・・ 【北条かりん】&【麻生真奈美】

## 第2話「踊るマコオネット」

スミス『な～んか、上方に物凄～く派手な名前が連なつていてるけど・・・。ま、いいかあ！』

スミス『やあっ！また会ったね、そこの中達！今日のゲーム進行はマスクシトキキャラであるボクが担当するよ～！』

かれん「特別ゲスト役を仰せつかつた、北条かりんです。よろしくお願いします！」

真奈美「同じく麻生真奈美ですー！」

スミス『一応、ルールを説明しておこうかな？今日はペアでの対決。総勢7組のペアによる戦いだよっ！』

スミス『それぞれのペアに異なつた条件が課せられて、制限時間内にそれらをクリアしないと、罰ゲーム！っていうのが、今回のルールなんだよねつ！』

かれん「条件の内容によつては、相反する条件があつたりします。そうなりますと、どちらかのペアが確実に脱落する事になります」

真奈美「これらのルールを計4回繰り返す事になりますー。つまり、4つの条件を総計24時間掛けてクリアしないといけないんですねえ～』

スミス「そつこいつ」とつーところでお2人方。今回優勝しそうなペ

アツて、一体誰だと思つ?」

かれん「うーんと……。本音を言えればお姉ちゃんを後押ししたいけど、本命はやっぱり総一＆桜姫ペアかな?」

真奈美「私は、やつぱり渚かなあ?麗佳さんと組んでるから、結構強いかもお?」

スミス「なーるほど。おおつーっせーく参加者のみんなが動きだしたみたいだよつ」

・  
・  
・  
・  
・

総一「ええと、じつちの方角でいいんだよな?」

総一達2人は通路を確認しつつ、ゆっくりと目的地へ目指していた。

桜姫「うん、そうよ。……なんか、こうじてるといつも登下校していく日々を思い出すわね」

総一「ああ、そうだな」

2人は手錠を掛けられている事もあつてか、互いに腕を組み合つていた。その様は恋人同士そのものだった。

今までの登下校では、お互に恥ずかしいのか腕を組む事まではしなかつた。それだけにどこか新鮮な感じがしていた。

桜姫「あら?この扉、開かないわね?」

通路の壁に備え付けられていた扉は取っ手がなく、電子ロックがかけられているようだ。

総一「他に目的地に行けそうな道筋はないな。やつぱつ口々を通過して、旗を取りに行くしかないよなあ・・・」

総一達に最初に課せられた条件は、【3時間以内に所定の場所に掲げられている赤い旗を取りに行く】ことだった。

総一「弱ったなあ。無理にこじ開けようとしたら、かえって取り返しがつかなくなるかもしれないし・・・」

桜姫「あ、じゃあ、私が取つて来てあげよっか?」

総一「どうやって?」

言いたい事が理解出来ない総一。それに気づいたのか、桜姫は言つより先に行動に移す。

おもむろに片手を壁に突き出す桜姫。すると抵抗らしき抵抗もなく、あっけなく壁に手が埋まってしまう。

桜姫「ホラ!私幽靈だから、壁をすり抜けたり出来るのよね」

総一「あ、ホントだ」

つい先ほど桜姫の幽霊を田撃した時はひどく驚いた總一だが、その現実を受け入れたのか、さほど驚いた様子はなかつた。

桜姫「それじゃ、私行つて来るわね」

總一「ああ・・・」

自身の手首に掛けられていたはずの手錠をすり抜け、電子ロックの扉さえもすり抜け、あつという間に姿を消した。

總一「ま、待てよ?」この展開どこかで・・・」

その考えに行き着いた結果、總一はガラにもなくガタガタと震えだした。

そ、そудー!なんでも氣づかなかつたんだ!!ゆ、優希が、交通事故に遭つた時もそعدつたじやないか!?

俺の誕生日のお祝いにと、近くのケーキ屋まで向かつた優希は帰らぬ人につ・・・!

總一「ま、待て!優希!待つてくれ!-!」

總一の叫びも、壁に遮られてしまつ。また俺は、優希を助けられないのか!?その絶望感が、罪の意識が、總一を押しつぶす。

總一「俺を置いて行かないでくれえ!-!-?」

必死で電子ロック式の扉を叩きつける總一。するとそこには

桜姫「つるさいわね、総一。静かにしなさいよ。」

総一「優希！？って、うわあああああつ！？？」

優希は、扉から顔の先端だけを外に出している状態だった。その様はまるで、顔の部分だけポツカリと穴を開けられた部分に、人が顔をおしつける看板のような再現だった。

総一「ぶ、無事か！優希！？」

扉から全身を出した桜姫の手には、赤い旗が握られていた。

桜姫「大丈夫よ。ホラ、このとおり

総一「そ、そうか。良かつた・・・」

桜姫「途中色々あつたけどね。トゲトゲだらけの天井が降ってきたり、大きな鉄球が坂を転がつてきたり。まあ、全部すり抜けちゃったけど・・・」

総一「優希・・・」

ギュッ！

桜姫「な、何！？いきなり抱きついたりして！」

総一「もう二度と離さない。お前一人になんかしないから・・・」

桜姫「嬉しい言葉だけど、ちょ、ちょっと苦しいってば、総一

こつして2人は、総一の気が済むまでしばらく抱き合っていたのであつた。

・  
・  
・  
・

仲良く歩調を合わせている総一達とは違い、互いに自分のペースで歩もうとする別のペアがあつた。

手塚「オラー、わかつての、オッサンー！」

漆山「い、いててつ！ひ、引張らないでくれ、手塚くん。手首が痛いじゃないか！」

手塚達2人もまた、総一達とほぼ同様の条件をクリアする為、目的地を目指していた。

手塚「……ん？」「イツあ、電子ロックか？」

そしてこれまた総一達と同じ障害物が待ち受けていた。ただし、位置的に総一達とは別の電子ロックなのだが。

手塚「操作パネルがあるな。押してみるか

扉のすぐ横の壁に設置されたそれは、1～10までの数字が表示された液晶ディスプレイだった。

漆山「あ、ああ」

漆山の返事を待たずして、それらを適当に押してみる手塚。しかし軽い電子音が響くだけで、何も変化が起こらない。

手塚「やっぱ無理か」

何度か押してみると、やはりピクともしない。それに少しイラだつたのが、手塚が無茶な提案をする。

手塚「いつそのこと強行突破してみるか?」

漆山「どうやって突破するんだね?」

手塚「んあ?えー・・・」

扉を壊せそうなものは手元にはない。正直なところ、勢いで言っただけだった。

手詰まり感の手塚だったが、『まかし気味に扉のまわりを調べていると、ふとダンボールが床に置かれているのに気がついた。

手塚「お?」  
「こいつは・・・」

漆山「何かみつかったのかね?」

手塚はダンボールのフタを破り捨てる。すると中に入っていたのは、何がなんだか分からぬ電子機器の数々だった。

手塚「な、なんだあ?」  
「イツは・・・」

手塚には何がなんだか分からなかつたが、意外にも漆山は理解したようだ。

漆山「おおっ、『ロイツ』があれば、ロックを解除出来るかもしれん」

手塚「なにつー・マジか!-?」

漆山は電子機器の数々を取り出し、それらを手際よく操作し、そして15分ほどたつた後。

プシューッ

ロックがかかつっていたはずの扉は、すんなりと開いたのだった。

手塚「ほーう・・・」

これには手塚も素直に感心していた。

手塚「やるじやねえか、オッサン」

漆山「ふ、ふん、見直したか?」

由良<sup>由良</sup>に誇る漆山。それが滑稽に映つたのか、手塚は満面の笑みを浮かべていた。

手塚「ああ、初めてアンタと行動を共にしてよかつたと思つてゐるぜ」

漆山「う、ぐむう・・・」

手塚「オッサンが唸つても、ちつともかわいくねえつての」

漆山「や、やかましそう！」

実際の所、漆山の持ち得る技術力は相当なものだ。電子機器のみならず、物を作つたり細工をしたり、器用さと想像力を求められるそれらは、もはや職人技と言つてもいいかもしない。

はた迷惑と言える難儀な性格さえ直せば、きっと出世したに違いないだろう。言い換えれば、それだけ損をしているわけだが・・・。

手塚「何はともあれ、これで先に進む事が出来るな」

と言つて、扉の一歩向ひに足を踏み出した、のだが。

手塚「なんじや、『イツは・・・』

心底呆れた感のあるトーンでそつそつ手塚。

タイル式の一面の壁に、石鹼やシャンプーにリンス、そしてニジンまりとした浴槽と、それらの類は、ここが浴室だという事を鮮明に示していた。

手塚「何でよりこもよつて浴室なんだ、オイ！」

手塚はなぜか傍に居る漆山に突つかかる。

漆山「お、俺に言わないでくれつ！？」

手塚「わざわざ浴室に電子ロック式の扉なんて大業なモンを取り付けたつてのか！？バカじやねえか！？」

本来なら主催者側の人間に言つべき事なのだが、影も形も見当たらぬので、完全に漆山に飛び火していた。

手塚「つと、こんな」とやつてる場合じゃねえな」

と言い、あたりを調べ始める。が、どこのからどう見ても不自然な点はない。浴室として見れば、の話だが。

手塚「強いて言えば、この窓をぐぐるしかねえのか・・・？」

その窓は小さく、人一人がやつと渡れる程度だった。しかもその先は闇に閉ざされており、何があるかが見えない。

手塚「暗くて向こうの様子が見えねえな。つてなわけで、漆山のオッサン、お先にどうぞ！」

漆山「ほえつー…？」

まるで理屈になつていらない理由で漆山を先導させる手塚。その表情はニヤツと笑みを浮かべていた。

漆山「な、なんで俺が・・・？」

手塚「なあに、簡単なコトや。重たいオッサンを不安定な上から引張るか、下からしつかりと支えるか、その違ひってワケさ」

もちろん、実際の理由は言葉どおりではない。要は毒味役を押し付

けているだけだった。

当然のことながら、漆山の態度には不満がありありと浮かんでいた。が、有無を言わせない勢いで、ほとんど強引に押し上げる。

漆山「いてつ！ いててつ！ …」

そして悲鳴を無視し、力ずくで漆山を押し込もうとする手塚。その甲斐あつてか、なんとか窓を潜り抜ける事に成功した。

手塚「何か足を引っ掛けたことはねえか？」

漆山「あ、ああ、足場が狭そしだが、なんとか」

手塚「よおし、・・・ひとまず危険はなきつだな。よし、オッサン！」

言いかけた手塚だったが、突如手錠が強く引張られる。

漆山「うわああああつ！ …」

手塚「なんだとつ！ …？」

足場を踏み外したのか、真っ逆さまに下に落ちる漆山。その勢いに引張られ、手塚まで窓の向こう側へと身を投げ出された。

ザバーン！ ！

すると、何か水の様な物に、全身を浸からせた。

漆山「ふはあっ」

手塚「げほげほつ、ば、バカ野郎！・・・」

思わず怒鳴りつけそうになつた手塚。だが、直にまわりの壁に触れた事で、それが何かがわかつた。

手塚「あん？」

それは、つい先ほど触れた感触と同じだつた。

漆山「な、なんだこれは・・・？浴槽か？」

漆山の言つとおり、そのものズバリ浴槽だつた。

手塚「浴室の窓を挟んでまた浴室だと・・・本当のバカじやねえのか、こここの連中！？」

集合住宅でも、どこかのアホな設計士でも、こんな訳わからん造り方はしねえぞ！何の為に窓があるんだよ？？

つてか、そもそもこんな所を通行するヤツあ、普通いねえよつ！

漆山「ブクブクブク（だから、俺は知らないんだ！ハツ当たりしないでくれえ！？）」

漆山の顔面をお湯に沈めて、怒りを露わにする手塚。が、そんな自分さえもアホらしくなつたのか、途端に漆山を解放した。

手塚「あ、一くそつ！？シッ！」  
「アヒルが多すぎて、もう何がなん

だかわからねえよ・・・

手塚はこれまでにないほど、脱力感といつものを感じていた。

漆山「し、死ぬ・・・！死んでしまう・・・」

この後、様々な怪奇な仕掛け？の数々に遭遇した2人だったが、何とか目的の黄色い旗を手に入れる事が出来た。

と、いうより危険があったというよりも、あまりにも意味不明な展開ばかりが待ち受けていたの過ぎないのだが・・・。

・  
・  
・  
・  
・

麗佳「はあ・・・、まさかこんな展開になるなんてね・・・」

渚「でもでもお、いつもの中の展開と比べれば、ずいぶんヒマシなんじやないかなあ？」

麗佳「あなたはお気楽ねえ・・・」

一方、麗佳＆渚の2人は、ずっと続く通路を進み続けていた。

麗佳「ええと、所定の場所に行き、そこに掲げられている緑色の旗をとればいいのよね？」

渚「そうよ～。けど、何かが待ち構えてそうな予感」

麗佳「それは間違いないわね」

そんなやり取りをしつつ、通路を進んでいくと、これまで全面コンクリートだった壁が途切れ、突如開けた場所へとたどり着いた。

麗佳「ここは・・・公園、かしら?..」

渚「みたいだねえ~」

地面が土のそこは、室内に造られた様々な木々があり、整備された遊歩道なんかもあり、まるでどこかの公園に散歩に来たような錯覚を覚えた。

麗佳「色々と無駄の極みね・・・」

しかも上の方には、寧ろ空が描かれており、太陽までしっかりと存在していた。

麗佳「さすがに本物の太陽じゃないようね。映像、か何かかしら?..」

渚「うーん、どうだろ?..」

麗佳「けれど日光まで照らされてるし・・・。きっと、そんな事考えてる場合じゃないわね」

先に急がなければ、そう思い数歩先に進んだとこで・・・。

麗佳「ああ………」

渚「び、びうしたのー!…麗佳ちゃんー?」

駆け寄る渚にすがりつきつつ、ひきつてある手を指差す。

麗佳「く、く、く、クモつ!…?」

差した指の方に、木の枝と枝の間に巣くっているクモの姿があった。

激しく動搖する麗佳に対し、渚はいつも変わらない表情を見せる。

渚「あ、ホントだ!…えいっ!えいっ!」

渚は何を思ったか、地面に落ちていた枝を拾い、おもむろにクモの巣をいじり始める。

渚「ぐ~る、ぐ~る、よし!出来た!」

クモの巣をかき回して、あるいはとかクモ自身を糸でがんじがらめにしてしまった。

麗佳「・・・・・・・・・・・・

完全に思考が止まってしまった麗佳の手を取り、再び歩を出す。

渚「これで良しつ ジャあ先い!」

「

麗佳「……もしかして」

クモより田の前に居る女性の方が未恐ろしきよつな……。そんな事を考えずにはいられない麗佳だった。

・  
・  
・  
・  
・

渚「あ、小屋はつけん！」

公園を進み、生い茂った森にたどり着き、その中へと入つていった  
麗佳達。

木々の間をすり抜けようとして歩いていくと、田の前に突如小屋  
が姿を現した。

麗佳「場所としては、ここで正しいこのよね？」

渚「うん~」

ふと周りを調べてみると、看板らしきものが小屋の入り口の前に立  
てかけられていた。

麗佳「……この店の名前を言ひてほひません……？」

看板には確かにそう書かれていた。

渚「うへたとへへ、ヒヒヒの意味だね~。」

麗佳「あ、あ・・・。」

考へても答へは出ず、ひとまず小屋の中に入ることにした。

麗佳とじては、イヤーな空気が漂つて中に入りたくなかつたが、そりも言つてられないと云つてかられた。

麗佳「行くわよ。」

入り口の扉を開け、中の様子を窺う。そこは何一つ置かれても飾られてもいらない質素な通路で、真っ直ぐに向かって続いていた。

麗佳「……行くしかないわよ。」

渚「悩んでてもじょうがなによ~。行動あるのみ!」

麗佳「あ、ちょっと、もう、ひらめくよ。」

すみだから・・・・・・」

ぶつぶつと文句を言つても、渚の後に続く廊下で麗佳。じゆく歩いていくと、再び扉に差し掛かった。

麗佳「扉の前に看板・・・・・ええと、西洋料理・・・・・」

その先を詠おうとして、ハッと口をつぐんだ。

「わたくしのこなこのうね  
麗佳「確かに、店の名前は書いつかないかな?」

麗佳は、先ほど見た看板を思い出し、渚の方に田舎せする。

ちなみに、今日の前にある看板には、 西洋料理店・山猫軒 と書かれてあった。

渚「うん。 安直な引っ掛けだよねえ~」

麗佳「・・・そ、そうね」

看板を尻目に、 扉を開いて先へと進む。

麗佳「また看板・・・」

扉の先へと進むと、 先ほどと同じ長い一本道と、 扉の前の看板が置かれてあった。

渚「今度は何だろ~?えーとお、 当軒は料理に時間がかかりますから、ご承知下さい だって?」

麗佳「は?どうして?・・・と言つよつ、 聞きたい事は山ほどあるんだけど」

麗佳はいぶかしんでいたが、 渚は全く気にしないようだ。

渚「料理の仕込みは、 時間がかかるのよお~」

麗佳「あなたの料理好きは知ってるけれど、 やっぱり変じゃない?」

やっぱりどうか、 目一杯変なのだが、 そんな麗佳の抗議を完全に

無視し、渚は扉を開く。

麗佳「はあ、またなのね・・・」

と思っていたのだが、今度は先ほどとは状況が違っていた。

扉と看板は同じなのだが、その脇に柄の長いブラシと、等身大の鏡が設置されていたことだ。

麗佳は看板に目をやると、やはり考えなしに先に進もうとする渚の首根っこを掴んで引張る。

渚「きやーは、離してえー」

麗佳「先行くんじやないってばー・引き返すわよー。」

渚「ふえ?」

麗佳「思い出したわ・・・」

先ほどから頭に引っ掛けっていた疑問。それが一つの答えとなつて導きだされた。

お客さま方、ここで髪をきぢんとして、それから履き物の泥を落としてください

そう書かれた看板を渚がじいーと見つめる。

渚「じれはー??.」

麗佳「あんたね！これは 注文の多い料理店 つて作品名で 」

渚のボケぶりに、思わずそう口走ってしまった麗佳。最初の看板の事を思い出したのは、事が起こってからだった。

ガタン！ガタン！！

麗佳「きゃあっ！？」

突如体勢を崩してしまった麗佳達。それもそのはず、突如小屋の床そのものがゆっくりとではあるが傾いているのだ！

渚「わあ～！扉と壁がきれいに崩れていいく～」

まるで仕掛けていたかのように、幾手を遮っていた壁と扉がきれいに外れ、床の傾きと自重に沿って、床を滑り落ちていく。

残つたのは床のみで、坂と化したその先にあるものを見て2人は驚愕する。

麗佳「な、何よ！あれ！」

渚「大きなおナベに、揚げ物の油みたいだね～」

渚の言うとおり、人が揚げ物にされるにけり。良い大きさの鍋に、油が注がれていた。

麗佳「のん気に解説しないで、床が傾ききらない内に逃げるわよ

つー！」

思い切り出口に駆け寄る2人だったが、その先から落ちてくる壁や扉、看板の残骸が通路を塞ぎ、思うように脱出出来ない。

そういうしている内に、床はもうだいぶ傾き、支えきれずに倒れた身体に入れて、床に踏ん張るのが精一杯だった。

麗佳「くうううつ！」

渚「あ、揚げ物にされるのは嫌ですぅ～！？」

そんな2人の悲鳴も空しく、床はさらに傾いていった。

麗佳「だ、ダメ！このままじゃ・・・！」

もはや身動き出来なくなつた2人。渚は首だけを後ろに回し、鍋の方を見やる。

渚「あれ・・・？」

するとある物が目に付いた。それは先にナベの方に落ちてしまつた扉や壁の残骸だった。

それらは満たされた油の中に浸されているのだが、揚げられることも発火して燃え上がることもなく、ただ油の中に沈んでいるだけなのだ。

渚「でも、この熱風は間違いなく近くで火が燃えている事の証明」

渚の目つきが変わった。それは料理人としての鋭い目なのだろうか？

つまり、このナベに火は掛けられているが、まだ温度が十分に上昇していないのだと見抜いたのだ。

渚「つてコトはあ～、きっとこうすれば……。」

麗佳「え！？」

麗佳は驚きに目を見開く。渚は身をよじり、ポケットから2つに分割された機関銃らしき物を取り出したのだ。

それを片手で器用に組み立て、ナベの方へと狙いをつける。

渚「年季がかつたレアものの銃！けれど、威力はお墨付きっ！」

などと好き勝手言しながら、銃弾を放つ。

ズドズドズドズドッ！

派手な音と共に、銃弾はお椀型のナベの、比較的油の浅い部分に向けて連射する。

ズルズルッ！

ナベに開けられた穴をつたって、温まりきっていない油が流れ出す。

ズドズドズドズドッ！

次々と放たれる銃弾によつて、ナベ全体に穴が空いていく。

シユウウウウウツー！

ナベの下の方から火が消える音がして、吹き付けていた熱風が次第に収まっていく。

渚「よお～し、任務完了～！」

麗佳「じゃないわよつ～！」

事の次第を見届けていた麗佳は、渚の無茶ぶりに、思わずそつそつ口む。

麗佳「あ、あなたねえ！？油の温度が思つたより低かつたから良かつたものの、一步間違つてたらどうするのよ～？」

もしかすれば、文字通り　火に油を注ぐ　結果となり得たかも知れないのだ。

渚「まあ、結果オーライってコトでえ～！」

そして悪戯っぽく微笑む渚。その笑顔には曇り一つない。

麗佳「うう、前途多難だわ・・・」

麗佳の嘆きは、そのまま現実のものとなつていったのであった・・・。

• •  
• •  
• •  
• •  
• •

## 第2話「踊るマコオネット」（後書き）

そんなこんな7組のペアは脱落する事もなく、それぞれ違う色の旗を手に入れたのでありました。・・・そのところは全部紹介してるとキリがないので省略します（汗）

咲実「そんな！私達の活躍は無視ですかっ！？」

葉月「おやおや。僕達の出番は、まだなのかい？ずっと待機してたんだが・・・」

次回は第3話「次第に（間違った方向に）過激さを増して」第一の条件をクリアし、次は第2の条件が出現！今回出てこなかったペアも登場します。【?】期待（^@^）

ちなみに・・・

スミス『あ～あ、総一＆桜姫ペアはすりつぶして、手塚＆漆山ペアは煮込んで、渚＆麗佳ペアは揚げ物にする予定だったのになあ～』

真奈美「この豚肉美味しいよねえ～」

かれん「うんつ 味付けもサイコーですね」

優雅に食事をしながら2人はモニターを見ていた。そこには、かりん達の様子が映っていた。

かりん『ちょっとアンタ達ーこの状況を見て、よくもまあ食事が出来るわねー!』

優希『ううへへへ』

一体2人に何が…?詳細は次回!?

### 第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して」（前書き）

第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して」

作者：桐島成実

参加者ペア一覧 残り7組中7組

・Hーススペード【御剣総一】&Hースハート【桜姫優希】・・・幽靈でも活動中

・ツーコローバー【葉月克弘】&ツーダイヤ【陸島文香】・・・和氣藪々と準備中

・スリースペード【高山浩太】&スリーコローバー【長沢勇治】・・・クールなフリして一休み

・セブンクローバー【手塚義光】&セブンダイヤ【漆山権造】・・・チョイワルオヤジ風（失礼）に活躍中！？

・ジャックハート【姫萩咲実】&ジャックダイヤ【郷田真弓】【相性最悪？最高？不明のまま苦戦中

・クイーンダイヤ【北条かりん】&クイーンハート【色条優希】・・・仲良く手をつないで移動中

・キングスペード【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】・・・あまりの条件に戸惑い中

司会進行役 ・・・ 【スマス】 ・・・ いつも通り邪な笑いを浮かべてます

特別ゲスト ・・・ 【北条かりん】 & 【麻生真奈美】 ・・・ 今回は傍観者を決め込んでいます

### 第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して】

優希「うう～」

かりん「どうしよう…」

とある部屋へとやってきたかりん達2人。彼女達もまた、自らの課された条件に困惑な表情を見せていた。

かりん「この、田の前に作られた豚肉料理を食べろ、っていうのが条件なんだけど…・・・」

かりんはそう言つて手に持つていた皿盛りの料理を前に出し示す。その料理はとてもおいしそうで、誰でも簡単にクリア出来そうな条件ではあった。

だが彼女達は頭を抱えていた。もちろん、豚肉料理が嫌いなわけじゃない

く、毒が入っているのでは？という懸念がある訳でもない。

優希「この状況で、食べなきゃいけないの…・・？」

いつもの元気な優希の姿は失せ、完全に動搖している。

優希が料理の少し向こう側へと視線を変える。するとそこには、

( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ ) ブヒッブヒッ

( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ )  
( ^ @ ^ ) ( ^ @ ^ ) ブヒッブヒッブヒッブヒッブヒッブヒ  
ツブヒッ

そう、大量の生きたブタが、あちこちに放牧されていたのであった。

かりん「ブタの集団の面前でブタ肉を食べろ、・・・なんて恐ろしい罠なの」

田の前に居るブタ達は、皿に盛られた同類に気づいて居るのだろうか？ そんなどうでも良い考えがよぎる。

するととそこに、天井に備え付けられていたスピーカーから、ものすゞくほのぼのとした会話が聞こえてきた。

真奈美『この豚肉美味しいよね～』

かれん『うんつ 味付けもサイコーですね』

優希「ーーー、この声って・・・（汗）」

かりん「あ、あの2人いーーー！ 私達が直面している問題を完全にスルーしてくれちゃつて」

かりんは衝動的に、スピーカーの横にある、かれん達が映ったモニター相手に怒鳴りつける。

かりん「ちゅうとアソンタ達ー」の状況を見て、よくもまあ食事が出来るわねっ！？」

( <@^ ) プヒィ～

優希「うう～・・・」

するとかれん達は、かりんが呼びかけているのに気がついたのか、食事しながら手を振ったりなんかしている。

かりん「こりちはアンタ達みたいに、暢気で陽気で無神經で、神経が図太くて非情で、周りの空気をまるで読んでいない冷血女じやないのっ！？」「

かりんの生涯で、今までに無いほどの罵詈雑言の数々を連呼していつたが、当人には聞こえてないみたいだった。

優希「ど、どうじょお

かりん「ま、待って！何か方法を考えるから」

そう言って、手を額に当ててしばらく考えていた所に、『周りの空気をまるで読んでいない』代表格が姿を現した。

スミス『やつほーー苦戦してるみたいだねえ？？』

かりん「ーー」れだつ！？

かりんは一体何を思ったのだろうか？突如目の前のスミスのカボチ

ヤ顔の部分を掴んで引っ引つとすると。

スミス『うわあああつ！？ボ、ボクは畑に埋まってる大根じゃないんだあー！！！』

かりん「大根じゃなくて、カボチャでしょ！？」

スポーツ！？

ものの見事に引っこ抜かれたカボチャの被り物？を、やはり何を思つたのか、それを優希の頭に勢い良く被せる。

ガボツ！！

かりん「これで視界を防げば、ブタさん達を見なくて済べれる！」

なぜこの考えに至ったのか、どうして他の有り余る選択肢を全て捨ててコレを選んだのか。誰にも、かりん自身も分かつていなかつた。と、いうより、かりんが代わりに食べれば良い、という考えをなぜ最初から捨てているのか？いや、恐らくかりんは気づいていないのだろう。

何はともあれ「優希+スミス」という、一種の組み合わせが出来てしまつたのだ。

優希「・・・・」

かりん「 ゆ、 優希・・・？」

突如動きがなくなった優希の顔を覗き込もうとするが、カボチャに隠されて、その表情を窺い知ることが出来ない。

優希「 ポピー――――――！」

かりん「 きやああつ！？」

突如ロボットがオーバーヒートしたかの様に、蒸氣を噴出す優希。それを呆然と見守っていると、

優希『 とおー！』

突然動き出したかと思つと、何やら決めポーズの様なものを決めだす優希。

優希『 私の名前は優希 パンプキン！ 地面の底から生えてきた、正義のヒロイン！』

かりん「 いや、 ヒロインって・・・」

とてもそんな格好には見えない、と言おうとしたが、それを聞かずして、優希はただひたすらに続ける。

優希『 ワルモノ達を見つけたら、この私が食べちゃうぞー！』

と、何かに目覚めた優希はそう言い残し、その場を素早く立ち去ろうとする。

かりん「いたつ！いたたたつ！！」

当然ながら手錠で繋がれているので、引張られるかりん。

この時になつて、よおーやく、自分の浅はかさを理解したかりんであつた。

・  
・  
・  
・  
・

麗佳「な、何よ、コレ！？」

渚「こ、こんなのは嘘ですかー！？」

各々が持つているPDAの条件を見た2人は、あまりの内容にしばし呆気にとられていた。

すると、備え付けられていた近くのモニターが突如起動し、画面上に新たなスミスの顔が一面に映し出される。

スミス2号『あー、もしこの条件をクリアできなかつた場合のペナルティとして、キミ達の恥ずかしいあれや、これなんかを、キミ達の知り合いにバラまく事になっちゃうよ～』

そして画面が何度も切り替わる。

麗佳「……やあああひーー、やめてーー、やめなれどーー！」

顔を真っ赤にして、手をブンブンと振つて猛烈に抗議する麗佳。

渚「い、意地悪ですよお～！？」

驚きに田を見開きつつも、彼女なりに反発する渚。

スミス2号『そうされたくなかったら、制限時間内に条件をクリアする事だねえ、あと3時間ほどかな?』

赤面の2人を完全に無視し、言いたいことだけ言つて、画面から姿を消す。

麗佳「くう・・・。し、仕方ないわ。か、覚悟を決めるしか」

渚「私の、こんなのは嫌ですう！」・・・」

麗佳 - 私たって嫌よ！？でも仕方ないじやない・・・

戸惑いつつも、彼女達はとあるペアを探し出す。スリーの数字を持つペアを。

•  
•  
•  
•  
•

高山「これが条件か。・・・誰かと対峙せよ、という意味だろうか

?

高山も長沢と共に、PDAの画面を確認していた。そこに書かれていた条件は以下の通りだつた。

【第2のゲーム開始より3時間以内に、紫の旗を取得する事】

長沢「旗は全員持つてるみたいだしね。絶対そうだつて！」

高山「ふむ・・・」

そんな2人の前に、別のペアが近付いてきた。

渚「あ、あのぉ、高山さん、長沢くん」

高山「むつ？」

麗佳「あなたたち、スリーのカードの持ち主よね？」

そう問い合わせられた高山達2人は、互いに視線を合わせ、話しても問題ない事を確認する。

長沢「ああ、そうだけど。何か用？」

その際、高山達は素早く2人の持つ旗の色を確認する。

その色は緑。どちらも高山達が探している旗の色では無さうだ。

とたんに歯切れの悪くなる渚。高山はその様子から、何か不審な感があると読み取つた。

渚「あ、あのぉ・・・、実は、ですね・・・」

渚「うう……。ボソボソ……」

高山「ん?」

麗佳「……ってわけよ」

そう締めぐくるが、何を言つてこのかはつきりとは聞き取れない。

長沢「はつきり言つてくれよ!姉ちゃん達」

麗佳「だから!あなた達を誘惑するのが私達の条件なのよつ!?」

半ばヤケになつた麗佳は、赤面しながらそつ答えた。

長沢「……はあ?」

当然ながら、その場の空気が固まつた高山達2人。麗佳は勢いにまかせて、大胆な事を続ける。

バサツ!

なぜか麗佳達2人は、全身に布地を巻いていたのだが、2人はそれを脱ぎ捨てる。

長沢「!なにつ!?」

高山「ほつか?」

その下には、あまりにも大胆な格好をした2人が・・・。

さすがの2人も、あまりの展開に最初驚きを見せたのだが、誘惑出来ているかと言えば、そうではなく。

高山「・・・・・」

長沢「・・・けつ」

渚「あ、あのあ～」

恥ずかしさを全力で隠そうとしている渚だが、誘惑している対象の2人に問いかける。

高山「・・・なんだ？」

その高山は、遠くの方で壁に腰掛け、タバコをふかしている。そのまま線は渚達とはまるで別の方向にむけられていた。

その表情には変化がなく、照れているのではなく、本当に興味がないようだつた。

渚「私達の為に振り向いてくれませんかあ～？？」

懇願する渚に対し、高山は田線を向けないまま答える。

高山「厄介」とには巻き込まれたくない

そうキッパリ言い切る高山。

長沢「右に同じ」

隣に座っていた長沢も続く。

麗佳「ま、待ちなさいよー…」れじゅ、まるで私達がバカみたいじゃないの…？」

高山「恨むのなら、主催者側を恨むことだな」

長沢「右に同じ」

全力で恥ずかしがっている女性2人に対し、まるで無関心の男性2人。その様子は滑稽であった。

渚「私達って、そんなに魅力がないですか～？」

高山「さあな。よく見ていないからわからん」

長沢「右に同じ」

麗佳「い、いいからわかったいに同じに同じになさい…」

高山「描画される言葉は無い」

長沢「右に同じ」

まるで「ノントの様な言葉のキヤツチボール（ほとんど暴投？）は続く。

渚「あなた達は、男の子ですかねえ？？違うんですかあ！？」

高山「年は食つたが、一応な」

長沢「年は食つてないけど、右に同じ」

高山「第一、相手に困つているわけではない」

長沢「右におな・・・」

一瞬、長沢の思考が止まる。

長沢「・・・今なんて言ったの？オジサン」

高山「相手など、掃き捨てるほど居るところ」とだ

そつ言ひきつて、タバコの煙を口から吐き出す。

長沢「え～？？？結構お盛んだつたんだな」

高山の変わりに、モニターと共に突如現れたスミスが答える。

スミス2号『実はそうなんだよあ～。ちなみに、高山さんのハーレム映像がコチラっ！？？』

モニターのスイッチを押す前に、高山の銃が火を噴く。

ズドーン！？

スミス2号『ぐおおおつ・・・』

その弾は見事にスミスの頭を貫通。そしてその場に力なく倒れるスマス2号。

短時間の内に、2体ものスマスが犠牲になってしまったのだ。

長沢「うわっ。もう滅茶苦茶だな、こりゃ・・・」

長沢の咳きを無視し、高山は腰を上げて立ち上がる。

高山「・・・時間だ。いくぞ長沢」

長沢「ああ、もつそんな時間か。じゃ、さつと片付けるか」

そう言い残し、その場を立ち去る2人。残されたのは、固まつたままの哀れな2人。

渚「私達って一体・・・」

麗佳「もつ、お嫁にいけない・・・」

2人きりになつて改めて、自らの恥ずべき行為を悔いたのであつた。

そんな2人を通路の角から覗き込んでいる視線が一つ。

漆山「うおおつー? 極楽至極じゃあ~」

それは漆山だった。一連の様子を見ていた漆山は、すっかり興奮しきっている。

漆山「も、もう我慢ができない…？そもそも彼女達をいたぐと…」

・

もちろんゲームの参加者である漆山にも、パートナーが存在するわけ。

手塚「ちつーもつこいだろ？早く解除条件をクリアしていいやせー。」

口では軽く言つてはいるものの、力ずくで漆山を弄ねずつていて手塚。

漆山「ま、待つてくれ…今良い所なんだ！？」

手塚「つたぐーあとでじつくり見りやいいだろ！？条件をクリアした後にな」

漆山「ひねねねねね」

手塚「手錠に、騒ぎ立てるオヤジ。これじゃまるで、のぞきの現行犯で強制連行！ってか？まったく…」

やれやれと言わんばかりの手塚は、ターゲットである『2』の持ち主の所までたどり着いた。

手塚「待たせたな」

葉月「やあ。待つていたよ」

手塚たちを待ち受けっていたのは、葉月、文香の2人であった。

手塚「おつかれ、おやんと用意出来てるじゃねえか」

葉月達の前に並べ立てられてるの、ワインやウイスキー、日本酒やその他様々な種類のアルコール類だった。

それらが床の1点に並べて置かれていた。その数は100本に迫る勢いだ。

手塚「一応確認しておぐが、この酒類の飲み比べをして、先に酔いつぶれた方が負け、といつことで間違いないな」

文香「ええ、間違いないわ」

手塚「に、しても相手が悪かつたな。俺あ、意外とアルコールには強いぜ？」

文香「あら～私だって自信はあるわよ～」

そう言って手を腰に当てる。これは血りをアピールする時の文香のクセだった。

葉月「僕はあんまりお酒には強くないなあ。漆山さんは？」

漆山「あ～ああ、俺は・・・」

手塚「弱いんだったな、確か。どじがけのヒペンドで酔いつぶれて寝ていた、とかほざいていたしな」

漆山「むう・・・」

手塚「だから、オッサンが唸つても可愛くもなんともねえぞ」

漆山「ほ、ほっとけ！」

葉月「まあまあ、じやあたつそく始めよつとじよつか」

それを念図じ、皆々のジロシキにワインを注ぎ込む。

文香「ワイングラスじゃなこと」いろが、風情がないわよねえ」

葉月「コンクリートの塊の中だしね。もつといつ夜景を見ながら・・・」

手塚「んなこいたあいいから、ひとつと始めつぞ」

そして1杯、2杯・・・10杯目に到達した。

量はともかく、すべてのアルコールの度数が高い為、必然と酔つの  
も早くなる。

手塚「つおお、結構キツイぜ・・・」

漆山「ふ、ぐ、彼女達の・・・麗しい姿を見るんだあ！」

漆山も手塚の予想に反し、奮闘していた。恐らくさつきの渚達の姿  
を再び見よつと、必死で堪えていたのだ。

手塚「つたぐよお、エロパワーだけは健在つてかあ？」

心なしかれつが怪しい。

葉月「うむ、やはり歳かな？もう酔いが結構・・・」

文香「あらあらあ、もつと頑張んなさいよ、おじ様」

4人揃つて完全に酔つ払いだ。

そして11杯、12杯と続き。

漆山「麗しの彼女達の・・・為。再びあの姿を・・・見る、為、なん、だあ～」

次々とジヨッキに注がれる恐るべき悪魔の液体。それを飲み干しつまるで呪文のごとく唱え続ける漆山。

そして13杯目、ついに脱落者が・・・！

手塚「ぐはあつ」

勢い良くウォッカを吐き出す手塚。そのまま床にひっくり返ってしまった。

文香「あらあ？でかい口叩いてた割に、たいしたことないのねえ～」

手塚「こ、こんな・・・バカな。この、俺が・・・」

すると手塚の視線にあわせて、文香が何かを見せ付けた。

手塚「」、「イツは・・・？」

ほとんど意識が混濁しつつ、それにピントを合わせようとする。どうやら金属製の缶のようだ。

文香「実はねえコレ、アルコールがそのまま入っているのよねえ」

手塚「んだとお！？」

文香「でえ、これを事前にあなた達が飲む酒に割り増してたってわけ」

飲む量に差が出ない様に、ペア別に同じ酒を分けて配列していた。その内、手塚たちが飲む分に、アルコールを含ませたというわけだ。

手塚「ゴホゴボッ！ん、んなのありかよお！？」

文香「ルール違反じゃないし、といふか、ルール自体無い様なモンだしねえ」

すると葉月も何かを取り出す。

葉月「僕はコレ。付き合いで同僚と飲む事があるからねえ。事前に酔い止め薬を飲んでいたってわけだ」

葉月と文香は、満足そうに笑顔を浮かべる。

手塚「く、くそったれ・・・卑怯者がつ！？」

文香「卑怯者の筆頭に言われたくはないわねえ」

葉月「大人のズルさって、こうやって使うものだと思うよ?」

手塚「ぐつ、・・・漆山のオッサンは・・・」

漆山はいまだ奮闘していた。だがそれも14杯目で限界だった。

卷三「文部省官報」

泡を吹いてひっくり返る漆口。あつと夢の中でも再び麗しい彼女達と再会していく事だらう。

葉月「僕たちの勝ち、と見ていいよつだね」

すると手塚たちが倒れこんでいる床が突如開き、落とし穴に真っ逆さまに落ちていった。

手塚「ぬおつー？」

淵に指を引っ掛け、しぶとく堪えようとする手塚だったが、あまりの酔いに、頭に思い切り衝撃が走った。

更に漆山の落ちる重さに引張られ、耐え切れずにそのまま落ちてい  
く。

手塚「畜生おおひーー！」のオッサンと組むと、口クなじがねえ！  
・・・

! . . .

それ以降、彼らが再び葉月達の前に姿を現すことはなかった。

文香「あーりあ、落ちちゃった」

まるで意に介していない文香。

葉月「うひむ」

途端にふりつくる葉月。それを反射的に文香が受け止める。

文香「だ、大丈夫かしら？おじ様」

葉月「む、ふふふふふつ。妻も娘もここには来ないだろ？」「どうだい文香くん、今夜一緒に・・・」

文香「やあだあーおじ様のスケベえー」

この絡み酒の応酬はしばらく続いたのであった。

・  
・  
・  
・

郷田「ホラー私の手に捕まりなさいー！」

一方の郷田＆咲実ペアは、落とし穴の罠に咲実がハマッてしまい、手錠の影響でからつじて落ちずに済んでいる状態だった。

咲実「す、すみません！郷田さん！」

郷田「いいから、早くつ……」

郷田にとつて、咲実の存在はさうでもよかつたが、このままでは自分まで落ちてしまうと考え、ひとまず助けることにしたのだ。

咲実「はあっ、はあっ

なんとか落とし穴から脱出する事に成功した咲実。

郷田「全ぐ、しつかりしなさいなー。」

郷田は強い口調で叱咤する。

咲実「い、いめんなさい。」

言われた咲実は、律儀にお辞儀をしながら謝罪する。

郷田「紫の旗は落としてこないでしょ？ ね？」

咲実が持っていた旗が、今も手に握られている事を確認すると、体勢を崩してだらしなくなる。

郷田「はあ～、やれやれ。何で私がこんな事をしなくちゃいけないのかしぃ？」

本来ならば、数少ない休日を好きに過ごす予定だったはずなのだ。

会社のカリスマ社長とつ立場上、まともった休日を取れる事は実

に少ない。

仕事熱心な彼女は度々休む事を良しとせず、他の社員が休みであつても1人仕事をしているほどなのだ。

郷田「今頃、仕事の事は忘れて、家でビール片手にゆっくりしてるのはずだったのに・・・」

ひととおり愚痴をこぼしていた郷田だが、そんな事をしている場合ではないのは重々承知。再び行動に移るのも早かつた。

郷田「ええと、私達のクリアしなくてはならない条件は確か、『青の旗を持っているペアから、旗を奪う事』よね?」

すぐ傍に居る咲実にそう確認する。

咲実「はい。間違いありません」

郷田「ただ、これは私の勘だけど、その青の旗を持っているペアも、同じ様な条件ね」

咲実「と、いいますと?」

郷田「そのペアは、私達の旗を手に入れる事が条件、だと思つわ」

確証がある訳ではないが、ゲームとしてはそんな展開が最良だらう。

郷田「つと、どうやら勘は当たったみたいね」

咲実「えつ？」

郷田の発言に、驚きの声を挙げる咲実。郷田の目線はある一点に向かっていた。

高山「ふむ、奇襲は失敗か」

その声の主は、青い旗を持つていいる高山だった。その手にはマグナム式の拳銃が握られており、その銃口は郷田達に向かっていた。

長沢「あ～あ、やつぱこんなコソコソと近付く奴じゃなく、一気に突撃した方が良かつたじゃんかよ」

隣には長沢も居て、やはり高山と同じ拳銃を手にしていた。

高山「距離があつては奇襲にはならん。もっとも、反響し易いこの狭い通路では、成功する方が稀だ」

咲実「え！？え！？」

郷田「逃げるわよ！」

動搖して首を左右に動かしている咲実の腕を、郷田が掴んで走り出す。

長沢「あ！待ちやがれっ！？」

高山「慌てるな。予定通りだ」

高山の言つとおり、これは想定範囲内の事だった。それを示すかの

よつて、郷田達が逃げた方の通路から、突如ガスが噴出す。

郷田「なつ！？」「これは催涙ガス！？」

それに気づいた時は、もうすでに少し吸い込んだ後だった。

咲実「じほつ、じほつ！？」

2人揃つて咳き込んだ為、バランスを崩してその場に倒れこんでしまつ。

長沢「これで袋の鼠だな」

高山「近付きすぎて、ガスを吸わない様にな」

長沢「わかつてるつて！」

長沢は持っていた銃を構え、郷田に照準を合わせる。

そして引き金を引いた瞬間

? ?『そこの悪党！待ちなさあーい！？』

突如高山達の後ろの方から、そんな声が聞こえてきた。

長沢「な、なんだ！お前はつ！？」

優希 パンブキン『弱き者の助けを聞いて飛んできた、正義のヒロイン！優希 パンブキンとは、私のことだあー！？』

長沢「……はあ？」

途中から句を言っているのか、長沢には理解出来なかつた。

郷田「な、何なの、あなたは！？ひょっとして、バケモノ！？」

優希 パンプキン『ちがあーうー！私の名は優希 パンプキンな  
『……』

高丘「おばけかぼちゃか？」

優希 パンプキン『だから、違つて言つてるでしょ！？』

咲実「助けを聞いて飛んできた。って、私達呼んでないんですけど・  
・」

優希 『うるさいー！』『私は私の出番なのー！』

かりん「はあっ、はあっ、は、付き合わされる私の身にもなつて・  
・」

こうなつた元凶である事を忘れたかりんは、完全にヘトヘトになつ  
ていた。

・  
・  
・  
・  
・



### 第3話「戦いは（間違った方向に）過激化を増して】（後書き）

高山＆長沢、郷田＆咲実の戦いに乱入した優希達。一体「」の後どうなってしまうのでしょうか…？

次回は第4話「もはや常識さえも破壊して」完全に舞い上がっていくプレイヤー達。果たして彼らと彼女達は、いざこく向かおうとしているのか、心つい期待

「」の頃、舞台裏では…

葉月「む、ふふふふふつ。妻も娘もここには来ないだろ？」「どうだい文香くん、今夜一緒に…」

文香「やあだあーおじ様のスケベえー」

葉月「ううーむ、久しぶりに若い頃を思い出し…んん？何か殺気が…！？」

明海（葉月の娘）「あーとーうーわーん…！」

そこには、表情こそ微笑んでいるように見えるものの、額には青筋を立てて、黒い炎の様なものを身にまとっている葉月の娘がつ…！

「」の後、しづらへ修羅場と化してしまいました…。

## 第4話「もはや常識さえも破壊して」（前書き）

第4話「もはや常識さえも破壊して」

作者：桐島成実

参加者ペア一覧 残り7組中6組)

『ハイパー・ゴールデン幼馴染カツプル』 ハーススペード【御剣総一】  
&エースハート【桜姫優希】・・・緑の旗の持ち主を探索中

『ベストバイプレーヤーズ』・・・ツークローバー【葉月克弘】&  
ツーダイヤ【陸島文香】・・・明美（葉月の娘）が葉月に対しても  
(以下略)

『危うきストライク・スリー・ゴンビ』・・・スペード【高山浩太】  
&スリー・クローバー【長沢勇治】・・・おばけカボチャ？に狙われ  
ています

『ビート・ザ・ジョーカーズ』・・・セブンクローバー【手塚義光】  
&セブンダイヤ【漆山権造】・・・無念の脱落、敗者復活はあるの  
か！？

『リアルキラーキーンズ』ジャックハート【姫萩咲実】&ジャッ  
クダイヤ【郷田真弓】・・・なんとなく影が薄い気が。存在感をア  
ピールできるか！？

『チャーミングフラワーズ』クイーンダイヤ【北条かりん】&クイ  
ーンハート【色條優希】・・・チャーミングどころか、怪物化しち

やつてます（汗）

『ローズプリンセス』 キングスペード【綺堂渚】 & キングハート【矢幡麗佳】・・・苦難の連続に、心が折れそうな気が・・・。

司会進行役 ・・・【スマス】 1号は顔を引っこ抜かれ、2号は銃殺。3号以降の出現はあるのか！？

特別ゲスト ・・・【北条かりん】 & 【麻生真奈美】 ・・・今之所、食事のシーンしかないような？

## 第4話「もはや常識をへても破壊して」

優希 パンブキン『弱き者の助けを聞いて飛んできた、正義のヒロイン！優希 パンブキンとは、私のことだあーーーーーー』

そつ高らかに宣告し、その場に居る2組のペアに立ち向かう優希パンブキン。

決まつたああつ！と内心喜んでいたのは、実際の所、当の本人だけだった。

長沢「色々言いたい事はあるけど、ヤバそうな感じはするな・・・」

高山以下郷田と咲実も、長沢と同意見だった。

優希 パンブキン『やーーーそこの悪党ー私が来たからには、これ以上の悪事はさせないよーーー』

長沢「悪党って、俺達のことか？」

高山「悪事？まだ何もやっていない筈だがな」

そんな事はお構いなしに、優希は謎の構えをとる。

優希 パンブキン『私が開発した、召喚術！！』

かりん「しょ、召喚術？？な、なによそれ・・・」

優希 パンプキン『我が僕たちよ！我的声に答へよー・スーパーゴールデンポーク！？』

ブヒィ~~~~~（>@>）（>@>）（>@>）（>@>）（>@>）  
^）（<@>）（>@>）（>@>）（>@>）

咲実「な、なんなのですか？…」

突如現れたのは、先ほど優希達が対峙していたブタの集団だった。

かりん「って、このブタ、わざわざあの部屋にいたブタじゃないつ！？」

私達の後をついて来たの？でも、いくつものノブのついたドアを通り過ぎたはず……。

そんな数々の疑問をスルーして、お構いなしに突っ走る優希だった。

優希 パンプキン『さあーてー！悪党どもをこりこりあげなさい

！』

（<@>）ブヒッ（♪解しましたあ）

優希の合図と共に、集団は揃って高山達に突撃していく。

（・・・@・・）ブヒィ～

高山「むひ、迎撃するだー長沢！』

長沢「あこよひ』

ズドドードー・ズガーンー！

繰り出される激しい攻防、次々に打ち落とされるブタさん達。

( ^@^ ) ブモオー ( ^@^ ) ブウー

優希 パンプキン『むむむう、このままじょまづいかも？・・・それならうつー！』

再び何かを召還しようとする優希。

かりん「つて、また何か出るのー？」

優希 パンプキン「いでよつ、我が同胞たちよつー！」

郷田「・・・今度はなんのかしら」

完全に呆れた様子の郷田をよそに、今度は床が開いて、そこから見慣れたスミスの集団が現れた。

スミス3号『お呼びですか、隊長！？』

スミス104号『やつと表へ出られたぜえ』

スミス1億2000万号『右手のチェーンソーが唸つちやうへ』

スミス1丁目4番3号』であ、『命令を……』

郷田「最後のは住所、かしら?..」

現れたスミスの総数はおよそ50体。それは狭い通路のコンクリートを隙間無く埋め尽くした。

高山「形勢不利か……。引き揚げるぞ! 長沢」

長沢「はいはいと」

そつ言い残し、その場を立ち去ろうとする2人。

郷田「巻き添えを食ひるのは御免だし、私達も引くわよ」

咲実「……」

郷田「ちょっと聞いてるの!..」

そう言つて咲実の肩をつかむ郷田。すると、何かを語るかのように

咲実はポツリと話出した。

咲実「私、このまま地味に終わるのはイヤです」

郷田「は?」

何を言つているの、といつ表情で咲実を見る郷田。しかし、咲実は意を決したかのように、スミスの集団に悠然と立ち向かう。

咲実「私のゼロ距離射撃、受けてみなさい!..」

セツ宣言して取り出したのは、なぜか拳銃などではなく、やたら大きな筒状の黒い塊だった。

郷田「な、何よそれ？・・・・・！」

黒い塊をまじまじと見つめる。すると、『J-1』寧に武器の名称がプリントアウトされていた。

郷田「これって・・・ロケットランチャー！？」

なぜそんなものが！どこから取り出したの！？様々な疑問と驚きが交錯したが、そんな事よりも、もっと気にすべき事柄に気がついた。

かりん「全然ゼロ距離射撃じゃないし」

郷田「つてーしつ『J-1』が違うでしょ！？」

高山「室内戦向きじゃない、あの武器は

郷田「あなた達ねえ！危機感といつものはあるのかしらー？」

長沢「あれって、重すぎ、デカすぎ、単発しか使えないし、個人戦じゃかえって不利だよね」

郷田「あ、一、もう！私、が変なの！？私が！？」

咲実「・・・私のゼロ距離射撃、受けでみなさい！？」

全く同じ単語を吐いて、崩れた緊張感を立て直した咲実。

郷田「ま、ま、ま、待ちなさいっ！…そんな物をこの狭い建物の中でぶつ飛ばすつもり！？」

ガラにもなく動搖を表に出す郷田。それだけこの武器が強力だとう事だらう。

下手をすればこの辺りをまとめて吹き飛ばしかねない武器。それを咲実は躊躇もなく、狙いを定めてぶつ飛ばした！！

咲実「あつたれええつ～！～！」

郷田「や、いやああつ～！」

ヒュルルルル・・・・

飛ばされた弾頭はゆつくりと弧を描いていき、そして、

ズガガガガガ～～～

今までに無い爆発と共に、あつという間に視界が煙で塞がれた。

スミス3号『うわああああつ～！？』

スミス104号『ヒツヤサヘ表へ出られたのにい～』

次々と粉々に粉碎されていくスミス達。

スミス1億2000万号『俺たちじゅ、所詮ザコ扱いつてわけかあ』

スミス1丁目4番3号』『新鮮、安値、安心の、3拍子そろつた豊富に野菜の数々。栄養も豊富に含まれています。ぜひ野菜は我がスマス農園にて』

郷田「・・・まさか、その住所みたいな名前は、農園の場所を示してるのがしら」

至極的確で隙の無いツツコミを入れる郷田。どうやら、わたわたと慌てるのがバカバカしく感じたようだ。

優希 パンプキン『むむむむうーーーー』『うなつたら・・・』

そこで優希は、なぜか傍に居るかりんの方を向く。

かりん「えー？私！」

優希 パンプキン『かりんお姉ちゃんの必殺の特技！それは・・・』

かりん「え？え？必殺！？」

優希 パンプキン『実は、身体のパーツを組み替えて、真の姿に変身するのだあーーーー』

かりん「私はバケモノかロボットの類なのーーー？」

優希 パンプキン『さあ、かりんお姉ちゃんの出番だよおー』

そう言つて、無理やりかりんの身体を組み替えようとする無邪気な少女が1人。

かりん「いたい！いたたつ！？いたいってばーー！」

優希 パンプキン『あれえー、おつかしいなあ・・・』

やはり不思議そうに首をかしげる優希。とはいっても、その顔は邪なカボチャそのものなのだが。

かりん「おかしいのは優希の方でしょー？優希にこんな事吹き込んだのは一体誰なのよつ！？」

ちなみに、その類を吹き込んだのは優希の父親。そしてそれを全開モードに切り替えたのは、他ならぬかりんだったはず。

当の本人は、自分がスミスの顔を優希にかぶせた事を、綺麗さっぱり忘れていた。それに対する仕打ちなのだろうか？

優希 パンプキン『むうー、仕方ない。なら今度は私が・・・』

高山「まだ続くのか？」

優希 パンプキン『見て驚くなー私の必殺技、目からビィーム！！』

ビィイイイイイッ！！

間髪入れずに、カボチャの目と口の部分から発射された光。それは高山達へと向けられていた。

長沢「うわあっ！そんなのアリかよ！？」

高山「違うー右だつ！！」

瞬時に避けようとした2人だったが、互いに全く別の方へとジャンプしてしまった。

その反動で、身体の勢いが止められてしまい、手錠がピンと張られる状態となつた。

ガキン！！

そこを、狙つたかのようにビームが通り過ぎる。

高山「くつー手錠が切れたか・・・」

手錠のチャーンが真つ二つに切断された2人。

高山「だが、今の状況ではかえつて有利か」

動きが制限されていた分、それが無くなればこちらにも勝ち目がある。そう高山は考えた。

優希 パンパキン『あつはつはーどうだ、まいったかあ！』

高笑いをする優希。しかし、

ピロコンピロコンピロコン・・・

突如、あたりに響き渡るアラーム音。それは何かの警笛を示している音だ。

優希 パンプキン『えつ？』

『あなた方は、ブタさんの前でブタ肉料理を食べるという条件を満たすことが出来ませんでした』

かりん「あ・・・。忘れてた」

頭をポリポリと搔くかりん。一方の優希が瞬時に固まってしまった。

『それでは、地獄の道へと』案内～』

パカッ！

お約束のごとく、床一面が瞬時に抜け落ちた。それは手塚＆漆山の時と同様だった。

優希 パンプキン『うわあーん！…これからだつたのに…』

かりん「私、結局何しにこいへきたんだろ・・・」

派手な演出？とは打って変わって、あっけなく落とし穴にハマッた優希とかりんの2人。

長沢「俺達の勝利」

パンプキンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

長沢の台詞を遮つて再び鳴り出したアラーム。

『あなた方はペアの証明である手錠を失つてしまいました。したがつてペナルティが加えられます』

長沢「な、なんだとつ！？」

高山「ふつむ、隠されたルールがあつたのか」

長沢「落ち着いてる場合かよ、おじさんっ！俺達の出番が消えちまつたんだぜ！？」

激高する長沢とは対照的に、やはり落ち着いたままの高山。

高山「構わんだろう。むしろ、こんな訳の分からんやつとは、俺達には合わん」

長沢「あー。言われてみればそつか

郷田「・・・私も激しく同意したこところなんだけど

いつそのこと、落とし穴に落ちた方が楽なんじゃないか、と郷田は心から思った。

高山「では、後は頼む」

ガタン！

床が落ち、あつけなく落ちていく高山と長沢。残されたのは咲実と

郷田だけだった。

咲実「やりましたね、郷田さんー！」

すると待ち構えていたかのよう、「達成感ありありな感じで咲実が話しかける。

郷田「私、何にもやつてないんだけどね」

咎めるような言葉とは裏腹に、何もしなくて正解だった、と暗に思つていたのだった。

咲実「このまま一気に主役の座を手にしましょーっ！…」

郷田「つまりは、このペア決定戦で優勝しそうと？はあ、もひ帰りましたわ・・・」

郷田の嘆きも、テンションが上がりきった咲実には通じないのであつた。

・  
・  
・  
・  
・

優希が中心となつて激しいバトルを行つてゐたが、別の所でも激しい攻防が繰り広げられていた。

麗佳「てえええいつーー！」

随分と気合の入った麗佳の雄たけびが通路に響く。

麗佳「喰らになさいつ……シンテレらるひりひりん ツインテールミ・ラ・ク・ル・ショット……」

やたらと派手なネーミングと共に、なぜか麗佳のシンテレ画像がプリントされた麗佳専用の銃から、やたらとカラフルな七色の光線が発射される。

・・・どんな銃の構造をしているかはさておいて。

桜姫「なんのつー總一 & 桜姫の愛の抱擁バリアガード……」

愛の形を示すハート型をした盾が、七色の光線を防ぎえる。・・・  
どうやって発生させたのかは置いといで。

渚「や、やりますねえ」

と感心しつつも、渚も攻撃を開始する。

渚「私はコレー軍用18式大型機関銃……」

総一「あ、味氣ねえ……」

とたんに現実的な展開になつた。微妙に空氣を読んでいない気がするが、彼女らしくはある。

渚「強い女はコワいのよお～……」

ズガガガガガガツ

ドア もんのおなじみ道具を取り出し、ドアを開いて盾にする。そ  
こに機関銃の弾が吸い込まれていく。

う  
・・・色々おかしな点満載ですけど、Iの際スルーしてねあほしょ

「——『カツ』『良い』とはいえないけれど、結果よければすべて良し——」

桜姫「ところで、今の行き先ってどー?」

# 総一「優希(大)の部屋」！」

何の躊躇もなく、そう答える総一だが、そこに桜姫の強烈なチョップが炸裂する。

桜姫「私の部屋の壁に穴あけて、どうしてくれるのでつ……」

「あつ！ 言われてみればそんが」

総一は何も考えずに桜姫の部屋を指定したらしい。・・・とはいっても、彼女自身既に亡くなっているはずなのだが。

やたらと呑氣なのはいつものことだが、渚は追撃を仕掛ける。しか

し、総一達も黙つてはいなかつた。

総一「次は」いつの番だ！！極寒の地で降り注ぐ大吹雪、行き～」

と言つて再び怪しげなドアを開く。

ヒュウウウウツ～～

すると冷氣と吹雪がなだれ込んでくる。

麗佳「ええいつ！それなら」

などと激戦を繰り広げる双方のペア。互いに拮抗していたが、それも決着がつく時が来た。

桜姫「これならどう？100の視点、相手を見抜く洞察力～～」

総一「つて、そりゃなんだ！」？

桜姫「あなた達の弱点、見抜いたり～～」

そつとらかに宣言する。

麗佳「な、なんですって！？」

桜姫「麗佳さん！あなたは最近、腕のあたりの脂肪を気にしていま  
すね！」

麗佳「なつ～～ど、どうしてそれを～～」

桜姫「それでこの間、脂肪を取る為にいくつかのダイエット器具を購入しましたね？」

麗佳「うつ・・・」

総一「・・・なんか、俺達が悪役みたいだな」

総一の弦をよそに、身動きがとれなくなつた麗佳。 桜姫は更に攻撃を繰り出す。

桜姫「渚さん」

渚「は、はひやいー?」

とつてちいやな予感が頭によぎったのだ。その声は裏返つていた。

桜姫「あなたは最近、田元の小じわを気にしていますね」

渚「ぎ、ぎへつー!ビ、ビヒーヘー!じゅへつてえ

なんとか踏ん張つた渚。

渚「わ、私はそんなの気にしたことよー!」

虚勢を張りつつも、体勢を整えようと/orする渚だったが、更なる追撃が待っていた。

桜姫「この間、あなたのバイト先のファミレスでイベントがあつて、その際写真を撮られそうになつて、すっごく慌てたよね?」

渚「ええつー?なんで知ってるんですかあー??」

総一「優希……。それ洞察力つて言わないぞ

どこから仕入れたんだ、その情報。そもそも住んでいる場所さえ全く違うのに。」

桜姫「もし~~眞~~に小じわが目立つてしまったら、なんて考えて、こつそり化粧を直しに行つたわよね?」

渚「う、あ、う……」

2人はそう言つが、総一と麗佳が見る限り、一体~~ビ~~に小じわがあるのか、まるで見当がつかなかつた。

そしてトドメを刺さんとばかりに言葉を続ける桜姫。その表情は至極真面目だったのだが、それが返つて恐怖感を増す結果となつていた。

桜姫「そんな渚さんの年齢は、今年で~~二~~じゅ

渚「!それを言っちゃダメですうー!!」

必死でその先を止めようと、機関銃で応戦しようとした渚。一瞬だが総一から注意が逸れてしまった。

総一「おりやあー!!

総一は持つていた謎のドアを、開いたまま渚達の方へと投げつけた。

麗佳「えつー？ キアウー！」

そのドアは、スッポリと麗佳達を覆つてしまつ。

渚「もしかして、私達の負けなのぉー？」

ドアに上半身を突つ込んだ状態で、渚は泣き顔になる。既に上半身は姿かたちが見えなくなつていた。

麗佳「・・・人気投票1位・2位ペアなのに

その言葉を最後に、はるか彼方へと姿をくらました2人。あっけない氣もするが、あの激しすぎる攻防の後では、仕方ない事だらう。

桜姫「一つ聞いていい？」

総一「ん?なんだ?」

一応勝利者となつた総一に対し、桜姫が尋ねる。

桜姫「今の行き先って△□なの？」

総一「え?あー、えつと・・・」

なぜか言ことよびんでいる総一。桜姫は直感で逆に指摘した。

桜姫「まさか、また私の部屋なんて言つんじやないでしょ?」

総一「いや、そうじゃなくって・・・」

言葉を濁していたが、ようやく一言ボソリと漏らした。

総一「咄嗟だつたから、行き先指定するの忘れた」

桜姫「・・・はい？」

意外な答えに、言葉が詰まる桜姫。

総一「あの2人がドコに行つたのか、俺にも分からない」

そう、彼女達がどこに向かつてしまつたのか、それはこの世の誰にも分からなかつたのだ。

つまり、行方不明となつたのだ。

総一「なむ」

桜姫「じりつ！ 振んでんぢゃないの……責任とつなさこよつ！？」

何はともあれ、これで残されたペアは3組。既に半分以上が脱落した事になる。

逆に言い換えれば、残されたのは強敵ばかり、ということになる。

郷田「そう、そして今度は私達が相手、つてことよ」

桜姫「そこに現れたのは、なんと例の年増女だつた」

郷田「つて、『ハーテン』でもないナレーションを勝手に作ってんじゃ  
やないわよっ！」

咲実「因縁の対決、再びですね。桜姫さん」

桜姫「・・・そうね。次も負けないわ」

・・・  
・・・  
・・・

## 第4話「もはや常識でさえも破壊して」（後書き）

今度は一体どのよつた戦いが待ち受けているのでしょうか。そして、料理者となるのは・・・？

次回は第5話「戦いの果てに」による決着の時が、今から期待

ちなみに

かれん「お姉ちゃんが落とし穴に落ちちゃった・・・」

真奈美「渚も行方不明になっちゃった・・・」

などと口にしつつ、湯のみに入ったお茶をずずずつ、と飲んでいる2人。

言葉にして出さなかつたが、その様相は、何が言いたいのか、読心術の心得がなくても明らかだつた。

かれん・真奈美「ま、いつかあ 」

すると、地面の底から、呪われたような声が響いてきた。

かりん『よくなあーいつーー!?』

姉の一喝も、妹のかれんは涼しげな顔だつた。

かれん「お姉ちゃんはどんな時でもシツ『リ』を忘れない、律儀な娘

でした  
「

かれん』でした、つて何よ！？いいから早く出してえ～！！」

彼女達以下8名がどうなったのか、それも一番最後に紹介されちゃ  
います

## 第5話「戦いの果てに」（前書き）

作者：

第5話「戦いの果てに」  
桐島成実

参加者ペア一覧 残り7組中3組)

『ハイパー・ゴールデン幼馴染カツブル』 ハーススペード【御剣総一】  
&エースハート【桜姫優希】

『ベストバイプレーヤーズ』 · · ツーコローバー【葉月克弘】 &

ツーダイヤ【陸島文香】

『リアルキラーキーンズ』 ジャックハート【姫萩咲実】 &ジャッ  
クダイヤ【郷田真弓】

## 第5話「戦いの果て」

総一＆桜姫ペアと対峙している咲実＆郷田ペア。際立つた闘志を燃やしているのは、桜姫と咲実の2人だった。

総一「な、なんか、すごい気迫だな・・・」

2人の間の空気が、ピンと張り詰めていた。

咲実「一応ですけど、お互に名乗つておきましょつか？」

暫ぐの沈黙の後、軽く挑発するかのように、咲実はそう切り出した。

桜姫「そうね・・・では！」

と言ひて、なぜか決めポーズを取り出す。

桜姫「明るく元気で活発な、正統派ヒロイン！春をイメージさせる『桜』と、一国の王女を意味する『姫』。愛しきパートナーに恋人として認められた私は、天下無敵！！怖いものナシ！――」

最後は、傍らに居る総一の腕を、しっかりと組んだ。

総一「な、なんだよそれ・・・」

呆気に取られている総一とは違い、すべてが完璧に決まつたと自信たっぷりに視線を浴びせる桜姫。

咲実「・・・それは違いますね」

そうキツパリと否定する咲実。その言い方は低く鋭かつた。

咲実「ある時はバラのように気高く、ある時はナイフのように鋭く、またある時は炎のように狂おしく、哀れな女を完膚なきまでに撃ちのめす！」

桜姫「哀れな女！？それって私の事！？」

咲実は返答しなかったが、その流し目が的を得ている事を暗に示していた。

郷田「今までのヒピソードから考えて、どう考へても哀れなのは咲実ちゃんの方だと思うんだけど？」

何気にキツい指摘をする郷田の台詞も、今の咲実には聞こえていた。

咲実「その様はまるで己が命をかえりみぬ、戦場のマタドールで危うくも激しい、『デス・ジョーカー』の異名を心の奥底に刻まれた、戦乙女－」この私の手にかかるべ・・・」

いつ終わるのかと他の3人は考えていたが、ほとんど自己陶酔にしか思えない咲実の自己紹介は、まだまだ続いた。

咲実「悪魔じみた破壊と力オスをこの世に生み出す、その生き様は『ワインディングワール』すなわち「黒き暴風」という崇高な異名で呼ばれるほどの脅威と美貌を持ち

郷田「ああもう！いい加減になさいな！」

とうとう耐え切れなくなった郷田は、強引に咲実の口をシャットアウトする。

桜姫「長すぎて聞くに堪えない自己紹介ね。私がもっと良い名前を考えてあげましょうか？」

咲実「なんですって！…融通の利かない頑固ババアのくせに…！」

先ほどの浮いた台詞とは打って変わって、罵詈雑言の数々が、次々と飛び出した。

桜姫「ば、ババアって何よ！？あなたとは同一年のはずでしょ！？」

咲実「あなたの考え方方が古臭くてババアだって言つてるんですよ…」

桜姫「あなたの方こそ、いつもいつも総一の後ろでブルブル震えているだけの、役立たずの背後霊みたいな存在のくせに…！」

咲実「言つてはならない事を言つてしましましたね！？」

激しく火花を散らし、罵り合う2人に対し、完全に冷めた（というか疲れた）表情を見せる残り2人。

郷田「はあ～…」

「まだ牙を向き続ける2人を見かねた郷田は、深いため息をついてそっぽを向いた。

総一「とりあえず俺はどうしたらいいんだ？」

無理に止めようとしても、頑固な桜姫を言い聞かせる事は到底無理だと、過去の経験で痛いほど理解していた。

と、言つより下手に関わりたくないというのが本音だつたりする。仕方なくだんまりを決め込んでいた総一だったが、それは突如聞こえてきた。

？？「その勝負、待つたあーー！」

総一「えつ？」

声はすれども姿は見えず。総一（と郷田）は、あたりを見渡す。しかし、やはり人の姿は見えない。

？？「2人の決着は、この私が預からせてもらいますっ！」

と言つて、間髪入れずに、次の変化があつた。

ガーハーハーハーハッ

突如部屋の床の一角が開き、そこから何かが上昇してきた。

かれん「ジャジャーン！…かりんの妹のかれん、ここに惨状つ…！」

真奈美「かれんちゃん、字が違つよお？」

かれん「あ、間違えちゃつた。ええと、ここに参上つ……」

突如出現した2人は、備え付けられているイスにそれぞれ座り、優雅に事を構えていた。

テーブルも中央に設置され、そこにワイン（っぽく見えるジュース）が注がれたグラスが2つ置かれている。

明らかに、くつろいでいたとしか思えない。

桜姫「あなたは・・・、かれんちゃん！？」

突然の大胆すぎる登場の仕方に、完全に毒気が抜けてしまった桜姫。

かれん「お久しごりです、優希お姉ちゃん！」

そんな桜姫に対し、律儀にお辞儀をするかれん。

真奈美「ええと、初めまして、でいいのかな？」

総一「ええと、あなたは？」

真奈美「麻生真奈美と言います。あ、それでですね、今回の対戦ステージは、こちらになります」

と言つたと同時に、総一達の後ろの壁が動き出した。

・  
・  
・  
・

かれん「おつたのしみーーーえくすとーりー、げーーむ」

と、高らかな宣言と共に始まった戦い。総一達4人は、用意されたイスに座つており、その前にはテーブルと、その上にボタンみたいのが設置されていた。

かれん「今回の戦いのテーマは、ずばりーーー総一さんをよく知つてこむのばじっちだ！」です！」

じりやらかれんは、司会役のようだ。身振り手振りで一つずつ説明していく。

かれん「これから、総一さんにに関するクイズを出題しますので、分かつた方は、そのボタンを押して答えてください」

真奈美「多くの正解を得た方が、優勝となります　ただし、不正解の場合は減点となりますので、注意してください」

真奈美はアナウンサー役なのだろうか？

郷田「…………かしら？」

すると、今まで「メント」を控えていた郷田が、突如切り出した。

かれん「なんでしょう？」

郷田「これって、そもそも私は関係ないんじゃない？といつか、既にペア対決という基準から外れているわよね」

郷田の指摘に対し、かれんはただニシコリと笑い、一言述べた。

かれん「パートナーの咲実さんを信じてあげてください」

郷田「……」

答えにはなっていないが、本気で訴えかけようとも思っていない郷田は、咲実に一任することに決めたようだった。

かれん「それではげーむすたーと、ですっ！」

真奈美「では、第1問目！」

そう言ってプラカードを取り出す真奈美。

真奈美「問1・総一さんが愛用しているトランクスの色は？」

総一「ちょっと待て！？」

いきなりなんて事を言い出すんだ、この人は！？という総一の悲鳴をかき消す勢いで、ボタンが押される。

ピンポン

桜姫「はいっ！」

かれん「では、優希さん」

桜姫「真っ黄色！！」

かれん「せいかい」

正解のコールと共に、派手に鳴り出すブザー。

ヒンボンヒンボン！－

「ちよつと待たんかいっつ！」

なんちゅー事を出題して、つてか、なぜそれが正解だつた分かつたんだ！？

真奈美「では、優希さんに10ポイント追加です」

咲実「くつ、まだまだこれからですよー！」

総  
の疑問と悲鳴は完全に無視され、無情にもクイズは続く。

真奈美 第2問目！」

真奈美「問2：総一さんの過去にあつた、恥ずかしい失敗談とは何か？」

總一「お、おこひー？」

これまたとんでもない事を出題、といつ悲鳴じみた声を言い切らな  
いまま、ボタンがそれぞれ押される。

桜姫「はいっ！えと、総一は、過去に階段こつままで、頭をぶつけたことがあるっ……」

咲実「私も！御剣さんは、以前学校のプールの授業で、誤つて床を滑らせてしまい、プールへ真っ逆さまに落ちたことがありますっ！」

これは何だ？手の込んだイジメか！？と、叫ぼうとしていた所に、冷めた表情の郷田が、嫌々ながらもボタンを押す。

どうやら、一応ゲームに対する意欲は、わずかながらあつたようだ。

郷田「そりねえ、バナナの皮を踏んづけてすつじふんだことかしら？」

先の2人と違い、明らかに答えが適当な思いつきだった。

かれん「みなさん、せいかいです」

ピンポンピンポン！

真奈美「それでは桜姫さん、咲実さん、それと郷田さん！それぞれ10ポイントずつ入ります」

郷田「せ、正解したの？？」

郷田はまじまじと総一の方を見る。すると総一は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

総一「な、なんで監知ってるんだ?? 優希はともかく、咲実さんや郷田さんがなぜ??」

郷田「はあ、意外ねえ・・・」

とても、幾多ものゲームを勝ち抜いてきた主人公とは思えない「ドジつぶり」だと、郷田は率直にそう思った。

真奈美「それでは第3問田一。」

総一「まだ続くのか・・・?」

もつやめて、と言ふだといひで止まらないだろうとこいつ事は、他ならぬ総一自身が、よく理解していた。

両サイドと、田の前に恐ろしい女性達が揃っているからだ。

真奈美「問3・総一さんは、いくつものヒッソードで、様々な女性を手籠めにしてきた女つたらしですが・・・」

総一「ま、待つてくれつづーーー?」

総一は本田何度田かの悲鳴と共に、心の中で涙を流し続けていた。

・

・・・・・

真奈美「ええと、ここまでの成績を説明しますと、27問が終了した時点で、優希さんが150ポイント。咲実さんが140ポイント。郷田さんが20ポイント」

郷田「私のは外してもいいって良いわよ」

時間にして、かれこれ2時間ほど、このクイズは続けられていた。完全に意氣消沈して、ぐったりしている総一。欠伸をしてほとんど一連のやりとりを聞いていない郷田。

桜姫と咲実も、さすがに疲れがたまってきたのか、どこか表情に疲労が窺える。

真奈美「それでは、第にじゅ・・・ええと、まあ、何問題でもいつかあ」

真奈美「問・総一さんが、今度の人生を共に歩んでいくパートナーとして、ふさわしいと思っているのは誰でしょう?」

出題が言い終わらない内に、ボタンが激しく何度も押される。

桜姫「はいっ! それはもちろん私よっ!」

咲実「違いますつー私に決まっていますー」

桜姫「くつ、ぬぬぬう～」

お互に鋭い視線を交わす2人。それをよそに、かれんは総一に問い合わせる。

かれん「今回のクイズの答えは、総一さん自身に答えていただきましょう」

かれんは意地悪そうな表情を浮かべていた。が、当の本人はまるで無反応だった。

かれん「もしもおーし、総一みーん！」

総一「・・・ふえ？」

魂が抜けていた総一は、呼ばれた事によつやく気づいて、変な声を挙げる。

かれん「ですからですねっ！？あなたの将来のパートナーとして、ふさわしいのは一体誰なのか、と聞いているのですよー？」

総一「ぱ、パートナー？？」

どうやら出題の部分から聞いていなかつたようだ。

かれん「そうです。要はあなたが一番好きで信頼出来る人を選べばいいんですよ」

総一「それなら・・・」

やつぱり優希しか居ないな・・・。少なくとも総一はそう考えていた。

総一「俺には優希しか」

桜姫「待って、総一」

意外にも、その答えを遮ったのは桜姫だった。

桜姫「その答え、咲実さんに変更してくれない?」

総一「え・・・?」

それは余りにも突然の事だった。

かれん「それは・・・、またなぜでしょ、う?」

桜姫「将来のパートナー、最初は私だつて思つてた」

総一と共に行動して、すっかり忘れてた・・・。

桜姫「でも私は、もう死んでしまつているから・・・」

総一「優希・・・」

そう。今でこそ一緒に居ることが出来る。しかしこれからもそのまとはいかないのだ。

桜姫「総一を支える事が出来る人。そして、総一に相応しい人は恐らく咲実さんだと思うの」

そつと咲実を見る。それは今までの敵対的な目線ではなかつた。

桜姫「私とあれだけ張り合えたんだもの。それだけ総一の事を思つてゐる証拠」

咲実「優希さん・・・」

その場に居る全員が、桜姫に注目していた。

桜姫「ねえ咲実さん。総一の口上、よろしく頼める?」

それは将来のパートナーとして、総一と共に歩めるかといつ問い合わせ

咲実「・・・はい！」

咲実に迷いはなかつた。その返事は力強いものだつた。

桜姫「総一」

桜姫は、今度は総一の方へと振り返つた。

総一「な、なんだ、優希」

桜姫「これで安心したわ。もう、私もいかなきやいけないし」

総一「え?ま、待つてくれ、優希!」

突然、桜姫の姿がうつすらとし始めた。

桜姫「総一も、咲実さんの事を快く思つてゐるんでしょう？？？私は分かるんだから」

どんどん透き通つていく桜姫の身体。さつきまで他の人達と同じ様に行動していたのが嘘のように見えた。

桜姫「私の代わりなんて言つたら悪いけど、咲実さんを泣かせたりしたら承知しないんだからね！」

そして、桜姫の姿は幻の一とく消えていった。。。

総一「ゆ、優希いいいいつ！！？」

総一の叫びも、空しく通路に木霊した。

咲実「御剣さん」

すると、咲実がそつと総一の肩に手をやつた。

咲実「きっと、御剣さんの事が心配だつたから、優希さんはここに現れたんだと思います。なら、優希さんを安心させる事が出来たんですから」

総一「咲実さん・・・」

咲実「今はまだ心の整理が出来ないと思います。けれど、少しずつでいいんで、私の事を見てくださいね」

総一「・・・ああ」

総一が動いた時、ジャラリと金属製の音が響いた。

咲実「え・・・?」れは」

すると、いつの間にか総一に繋がっていた手錠が、桜姫から咲実へと繋がっていたのだ。

しかし2人はそれを不快には感じなかつた。

咲実「行きましょう、御剣さん」

総一「分かつた! 行こ!」

そう言つて2人は、新たなペアとして共に歩みだしたのだった。

・  
・  
・  
・  
・

郷田「って、ちょっと待ちなさいな!」

すると、忘れ去られていた人物が1人、騒ぎ出した。

郷田「仲睦まじいのは良いとして、私の立場はどうなるのかしら?」

総一「ああ、居たんですか、郷田さん」

郷田「くぬう、そんなに私の存在薄かつたかしい・・・。それにしても、まさか咲実さんに捨てられるとは思いもしなかったわ」

どいか悔しい感じがするのは、せつと氣のせいでは無いだろう。

真奈美「せつですねえ。ペアとして成立したのはこのお2方ですか  
ら」

かれん「郷田さんはペア失格という事で、罰ゲーム確定！ですね」

郷田「ですね ジゃないわよ！そんなのアリな訳！？」

問い合わせる郷田に対し、かれんはニッコリと笑顔を振りまいていた。

かれん「はい、アリです」

そしてかれんは手元にあつたスイッチを押す。

ガタン！

郷田「きやあああつ！？」

郷田の下の床がポツカリと空き、そのまま郷田は落ちてしまつ。

郷田「エピソード『7』の序盤といい、私は所詮落ちる運命なの！」

？

その声も、再び閉ざされた落とし穴からは聞こえなかつた。

かれん「なかなか面白い見世物でしたよ？」

かれんの無邪氣な笑顔は、どこか末恐ろしい感じが漂つていた。

総一「何はともあれ、これで残されたペアは俺達ともう一組つてわけか」

すると戦いはあと一戦のみといつゝことになる。

咲実「お世話になりました。私達は先へ行きます」

そう言つて2人は前へと歩もうとしたが、それを制した者が居た。

葉月「その必要はないよ」

総一「！？」

その声は、残されたペアである葉月さんだつた。

文香「私も居るわよ」

2人仲良く総一の方へと向かつてきた。・・・葉月さんの顔にいくつものアザがあるのは気になるが・・・。

しかしながら、当人は何もなかつたかのような振る舞いだ。

文香「それにしても、中々の活躍だったじやない、咲実さん」

咲実「見てたんですか？」

驚きを見せる咲実に対し、文香は余裕の表情だ。

文香「ええそりよ。モニターを通してね」

総一「モニター……？」

それは総一には不可解な答えであつた。その疑問に答えるかのように、葉月は言い出した。

葉月「もう隠す必要もないかな。……今回のこのゲーム。主催したのは実は我々なのだよ」

総一「は、葉月さん達が！？」

葉月「そうさ。僕と文香くん。それとかれんさんに真奈美さん。あとスマス君もかな？我々が画策してこの企画をスタートさせたというわけだ」

つまり、葉月達はハナから全てを見通していくたどりつけだ。

咲実「そ、そんな……。一体なぜです！」

咲実の問いに対し、くつくつと不気味な笑いを浮かべているのは葉月だった。

葉月「なあに、たまには我々が主役になつても良いかなと思つてね。だから他のすべてのペアを倒せば、その念願が叶うと考えたのだよ」

文香「そつ。今の所私達完全な脇役ばかりだったしね。今だつて敵の大幹部みたいな位置に居るし」

葉月「けれど、それもいづれ近い内に終わる。我々の勝利でね」

それは、最後の戦いの火蓋が切つて落とされた事を宣告するものだつた。

かれん「そうです。再び私達の出番ですね」

そいつ言って一歩前に出るかれん達。

真奈美「ええつと、決勝戦の戦いのテーマはですねえ。「料理の味は愛の味 パトナー 料理対決！？」ですう」

そう言って、テーマが書かれたパネルを高らかに持ち上げる真奈美。

真奈美「この近くに戦闘禁止エリアがあります。そこにはキッチンも存在しますので、場所はそこになりますよお」

かれん「そこでペアの片方が料理を作り、もう一方が料理を平らげる、というものです」

一通りゲームの詳細を説明している真奈美であつたが、意外にも一番動搖しているのは文香だつた。

文香「ちょっと葉月のおじ様」

文香はボソボソと葉月に耳打ちしてきた。

文香「なんで料理対決なの？私の料理が壊滅的だつて知ってるでしょー！」

葉月「ふつふつふ。だからなのさ」

慌てる文香に対し、葉月は大人の余裕だ。

葉月「キミの料理を食べてこそ、眞のパートナーと呼べるものだよ」

文香「それって、微妙にひどくありません？」

一方、比較的落ち着いているのは咲実だった。

咲実「私、料理にはちょっと自信があるんですよ」

総一「俺は作らなくとも良いのか？」

咲実「私に任せっきりでいい！」

しかし、この料理対決の行く末は、あまりにも凄惨なものであった。

もちろん、そのを予想していたのは、この場には居なかつた。ただ1人を除いては・・・。

• •  
• •  
• •  
• •  
• •

## 第5話「戦いの果て」（後書き）

いよいよ決勝戦が開幕となります。残されたペアの内、勝利を得るのは一体どちらか…？

次回は最終話「真のパートナー決定！？」いよいよすべての決着がつきます。そして脱落したペアは一体…？

## 第6話「真のパートナー決定！？」（前書き）

最終話「真のパートナー決定！？」

作者：桐島成実

### 参加者ペア一覧

『新生・騎士と姫君逢引ラブラブペア』 ハーススペード【御剣総一】  
＆ジャックハート【姫萩咲実】 VS 『超・ベストバイプレーヤー  
ズ』・・・ツーコーバー【葉月克弘】＆ツーダイヤ【陸島文香】

## 第6話「真のパートナー決定ー!?」

残り2組となつた総一達4人は、舞台となるキッチンが設置されているエリアへと立ち入つていた。

総一「うわっ、色んな食材があるな」

キッチン横の大きなテーブルの上には、古今東西の色とりどりの食材が、所狭しと並べられていた。

かれん「ルールは先ほど述べた通りですから、さっそく始めましょうか」

その言葉を合図に、総一&咲実ペアは咲実が、葉月&文香ペアは文香が、それぞれ料理を開始した。

真奈美「あ、あのお。かれんちゃん」

すぐ脇に控えていた真奈美が、かれんにそつと耳打ちする。

かれん「ん? どうしたのですか?」

真奈美「今回のゲーム、料理を作つて、その相方が料理を食べるんだよねえ?」

かれん「そうですよ」

かれんは当然のようにうなずく。

真奈美「それで、一体料理の判定はどう行つる？」

かれんが皆に説明した内容は、真奈美が言つてゐる以上の説明はなかつた。

かれん「実は、相方がいかに美味しそうに料理を味わうか。それを私達が見て判断するの」

真奈美「ああ、なるほど」

判断基準は、料理の美味さそのものではなく、いかに料理を美味く味わうか。

それを総一達には知らせず、素のままの反応を窺つとこつことなうだらう。

真奈美「でもそれって、判定するの難しくない？」

言つてしまえばリアクションが大きい人や口の旨い人が、いかにも美味しそうに振舞えば、それだけ有利になるからだ。

逆を言えればじつくり味わうタイプには不向きだといえる。

かれん「そうでもないかも」

しかしかれんはさほど心配していないようだつた。

・

・・・・・

文香「やつぱり、正面からぶつかつたら勝ち田はないわね」

そう言つう文香の手には、フタに塩と書かれた容器と、砂糖と書かれた容器が、2つ並べられていた。

文香が頭に浮かべてゐるのは、かつて手塚達を相手にした時に、アルコールを水増しした時の事。

文香「ルール違反、じゃないわよね」

文香は2つの容器のフタを外し、フタを入れ替えて、再び取り付ける。

文香「これで、咲実ちゃんは塩と間違えて、砂糖を使うはず」

あとは仕上げとして・・・。

文香「えーと、ん?これは何かしら?・・・まあ、いつか。ちょうど砂糖に近い色合いでだし、適当に混ぜ込んでおけば」

そう言つて、適當な調味料らしきものを砂糖に流し込んだ。その使い道を知らずに混ぜたところは、料理が壊滅的な文香らしかった。

文香「あとは、私が料理の手順を間違えなければ・・・」

昔の失敗（当人は忘れたつもりだつたが）を必死で思い出し、正しい料理方法を思い出そうとする。

文香「ええと、水をたしか、700ccだつたかしら？2人前だから半分で良いのかも？」

忘れたかった記憶なので、断片でしか思いだせない。

文香「お酒が、えつと200cc。うん~と、煮込んだ後にに入る？酢は必要だつたかしら？」

記憶だけを頼りに作る文香は、もはや何の料理を作っているかさえ、理解していなかつた。

・  
・  
・  
・

咲実「フンフフンフフーン」

呑気に鼻歌を歌いながら、手際よくフライパンをいじる咲実。行き当たりばつたりで慌てふためいている文香とは対照的だつた。

咲実「えっと、ここの食材を切つて・・・」

咲実は包丁片手に、食材らしきものを切る。

総一「？咲実さん、その食材は？」

キッチンの横にあるイスに座っていた総一は、咲実が奇妙なものを刻んでいるのに気がついた。

咲実「ああ、これですか？」

咲実はそう言って食材を手に取る。それはなんとなく所々焦げた力ボチャに見えた。

咲実「これはですね、前に拾つておいたスミスさんの残骸です」

総一「ぶつつつ……？」

突然、とんでもない発言を聞いた総一は、飲んでいた紅茶を一気に噴出す。

葉月「わっ！そ、総一くん！？」

対に座つていた葉月は、それに驚いて飛びのく。

総一「あ、すみません。って、咲実さん！なぜわざわざそれを……？」

カボチャなら、普通に用意されているんだが。

咲実「普通の食材を使つても、勝ち田があるとは思えません。ならば、特別な食材じゃないといけない気がするんです」

そう力説する咲実だが、総一は率直に普通の食材を使つたほうが良い気がした。

咲実「これで、ギャフンと言わせてみせますからー。」

総一「いや、それ食べるの俺なんだけどー!?」

ギャフンと言つてしまつたら大変だ!…という総一の意見は当然のようにスルーされてしまっていた。

・  
・  
・  
・

かれん「さあーて、料理完成!ですね」

“どうやら2人揃つて料理は完成したようだ。

葉月「う、ううーむ・・・」

今回これを企画したのは葉月だったが、彼は今とても後悔していた。

文香くんの料理はヘタだと聞いてはいたが、それを覆す策を考えてくれると思つていた。

それは主役になりたいという文香の信念を、葉月は共感を覚えたと共に信じたが為といえる。

だが、現実は得てして残酷だった。

総一「な、何かものす」いやな予感がするんだけど」

総一も、咲実の事を信じていたものの、額から汗が流れ落ちている。

かれん「それでは、お楽しみの試食たい一む」

そつまつて、総一達に食べるよつに促す。

葉月「くつ、じいじが主役になれるかどうかの瀬戸際。主役ならば力ツ」よく決めるものぞー。」

葉月は覚悟を決め、皿の前にある恐らく料理だと思われる物体に箸をのばす。

料理だと思われる、ところは。裏を返せば料理に見えないという事なのだが。

鼻につくような異臭は、氣のせいだとこいつにしておけ。

総一「咲実さんはまだマシに見える。けど・・・」

グツと言いたい事を堪えて、ガツと箸でカボチャをつづいて口に放り込む。

パクッ

モグモグ・・・

文香「ビ、ビうかしりっ・葉月のおじさま」

咲実「びりでじょう? 御剣さん」

顔が引きつっている文香と、なぜか自信たっぷりの咲実。しかし、暫くのち、食べた2人に劇的な変化があった。

葉月「……うむ、これはなかなか味が効いて……」

ほめ言葉はここで一断される。

ふうっと葉月の意識が飛び、イスから転げ落ちてしまう。

文香「きやああつーおじ様! ?」

文香はある程度予想はしていたが、卒倒するとは思ってなかつたようだ。

総一「があつ! ?ぐうつ! ?」

咲実「み、御剣さんつ! ?」

総一の方は、口に含めど飲み込めないようだつた。その理由は当人しか知る由がなかつた。

総一「むぐぐつ! ?」

総一が言葉を発することが出来たとしたが、こう書つたのだらう。

総一『』、このカボチャ、口の中で蠹いてる……、生きているの

か！？』

だが、口の中で暴れるそれは、総一の発言を許さない。

総一「が・・・がくつ」

結局飲み込めないまま、総一は床にひっくり返ってしまう。

かれん「あらら、これは予想以上ですねえ」

この結果を最初に予想していたのは、かれんだけだった。しかしそのかれんも、意識を失うほどだとは思ってなかつたようだ。

かれん「えーと、ですね。」『』『』結果になりましたので・・・

かれんは咲実達の方へと向き直る。

今回の最強なペアが決定しました！今回の優勝者は・・・。

ジャジャーンといづ音楽と共に、ペアの2人のスポットライトが当たる。

かれん「咲実&文香ペアのお2人でえーす！！」

文香「ええつ！？」

咲実「えええつ！？」

2人は驚きの声をあげる。

かれん「人を一撃必殺でぶつ倒すほどの威力。それは正に最強といえる料理でした。それらを見事作ったお2方に拍手」

パチパチパチ・・・

モニター越しに、誰かの手を叩く音が一斉に聞こえてきた。

文香「こ、こんなハズじゃ・・・」

咲実「せっかく御剣さんと一緒になれたのに・・・」

2人は悲しむようなそうでないような複雑な表情をしていた。が、目の前で倒れている2人の事は眼中にないようだった。

総一「だ、誰か救急車・・・」

総一の助けも、咲実と文香には聞こえていなかつた。

・  
・  
・  
・  
・

かりん「だ、誰かここから出してよお～」

助けを求めていたのは、何も総一だけではない。

優希「うう～、臭い、臭いよお～」

優希は身動きがとれない状態で、必死に鼻を押さえようとする。だが、いつでも顔はかつてのスミスのままだったのだが。

かりん「何で落とし穴の果てに、大型ゴリラの口が置かれているのよつ！？」

今2人は、ゴリラの口の中に完全に埋まってしまった。落ちた瞬間は、クッシションによつて衝撃をモロに受けなくて難を逃れたが、それもゴリラの一つに過ぎなかつた。

かりん「いちいち解説しなくて良いから、早く救助お～！」？

・  
・  
・  
・  
・

麗佳「一体ここはどうじだつて言ひつのよーー？」

ヒステリックに叫ぶ麗佳の声も、吹き続ける吹雪によつてかき消される。

渚「進んでも進んでも雪の道・・・。もしかして、ここ日本じゃないんかも〜」

2人はかれこれ6時間も、吹雪の中をさ迷い続けていた。

麗佳「も、もうダメ・・・」

麗佳はその場に倒れてしまう。薄着のままじこまでいたのは奇跡。いや、強靭な精神力のおかげなのだろう。

渚「私もおー。うう、乙女の人生は短かつたよおー」

渚の嘆きを最後に、2人の意識は薄れ・・・ようとした時。

ジリジリジリジリ・・・

突然吹雪が止み、続いて照りつけるような暑さが周りを支配した。

麗佳「え、ええつー?」

極寒の地から一転、突然猛暑の地へと化してしまった。それは幻なんかではなく、さきほどまで埋め尽くされていた雪が、すごいスピードで溶け出したのだった。

渚「ど、どおして??」

世界中のどこを探しても、こんな極端な温度変化をする大陸はない。

麗佳「こいつて、本当に地球・・・なのかしら?」

そなはるか彼方に飛んでいく様な予想を、麗佳は首を振つて否定したのだった。

・  
・  
・

・・・・・

長沢「うわあつ！？ びわあつ！？ びおつ！？」

長沢は障害物を避けながら、必死で走り続けていた。

高山「大型のコンベアの上に、細身のボディとカボチャが流れている。ここはスミスの製造工場か？」

高山も同様にコンベアを逆走しているが、その動きは軽やかだった。

長沢「の、否気に状況判断してねえで、なんとかしてくれよー。」

高山「そつこわれてもな」

コンベアの両端は壁があるのみ、逃げよつこも逃げれない。

高山「むつ？」

逆走してもジリ貧なので、コンベアの流れに沿つて走つていると、完成したスミスの集団が、きれいに一列に並んでいた。

長沢「な、なんかどこかで見たような光景が・・・」

そう、それは落とし穴に落ちる直前の出来事と被つている。

スミスRH-215号『侵入者発見！排除します！』

高山「やはりそう来るか。迎撃するぞー！」

高山はそつ言つて銃を構える。

長沢「はあ、はあ。」「、」「りや、家で大人しくしていいた方が良かつたかもな・・・」「

高山「早くしろー長沢！」

・  
・  
・  
・  
・

郷田「な、何なのよ、これは！？」

郷田は1人、4面を壁に囲まれて、謎の液体が満たされている場所に放り出されていた。

郷田「この液体の色、どこかで見たわね・・・」

しかしそれが何かピンとこない。

すると、壁の方に設置された、スピーカーから声が聞こえてきた。

明美（葉月の娘）『それはあなたの大好きな、ビールなんですよ』

郷田「！誰っ！？」

郷田の驚きも、明美には届かない。

明美『一応、かれんちゃんからお願ひされたので、実行しますね』  
そう言って、明美はスイッチを押す。そこには【スタート】と書かれており、その上のプレートに、【超大型洗濯機】と刻み込まれていた。

明美『ゆっくり味わってください』『

ピッ！

郷田「な、何！？」ビールが渦巻き状に…？さやああつ…？

ゴウンゴウンゴウン…・・・

後に響いたのは、モーターが回転する音だけだった。

・・・・・

手塚「何が悲しくて、服を着たまま泳がなきゃなんねえんだ…・・・」

手塚と漆山は、辺り一面海の真っ只中に放り出されていた。

手塚「つたぐーせたひひへ縦横瀬な瀬とじ六を落ひてみじや、  
海とな  
「

至極瀬やかな海ではあつたが、どつちに瀬があるか分からぬ。

漆山「てつ、手塚くん！？た、助けてくれえ～」

するといすべ隣で漆山の助けを呼ぶ声が聞こえる。

手塚「お、お、おーコラー！俺の腕こしがみつくんじゃねえーーー！」

漆山「お、俺は泳げないんだあーーー！」

手塚「アホかー！？俺を道連れにするなあ、ボケッーーー！」

ボケッ

漆山「ブクブクブク・・・

～END～

## 第6話「真のパートナー決定ー?」（後書き）

みんな揃つて悲惨な目に遭いましたが、やはり色々おかしなお話でした。

結局の所、みんな揃つて被害を被っちゃいました。なむ～他のH-Pソースと違い、短めでしたけれど、お楽しみいただけたでしょうか?

それでは、いざよひ また会いましょうー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2013n/>

---

シークレットゲーム～BEST OF THE PAIR～ 仮想エピソード  
2010年10月9日20時42分発行